

明倫

鄉土史號

Y 2

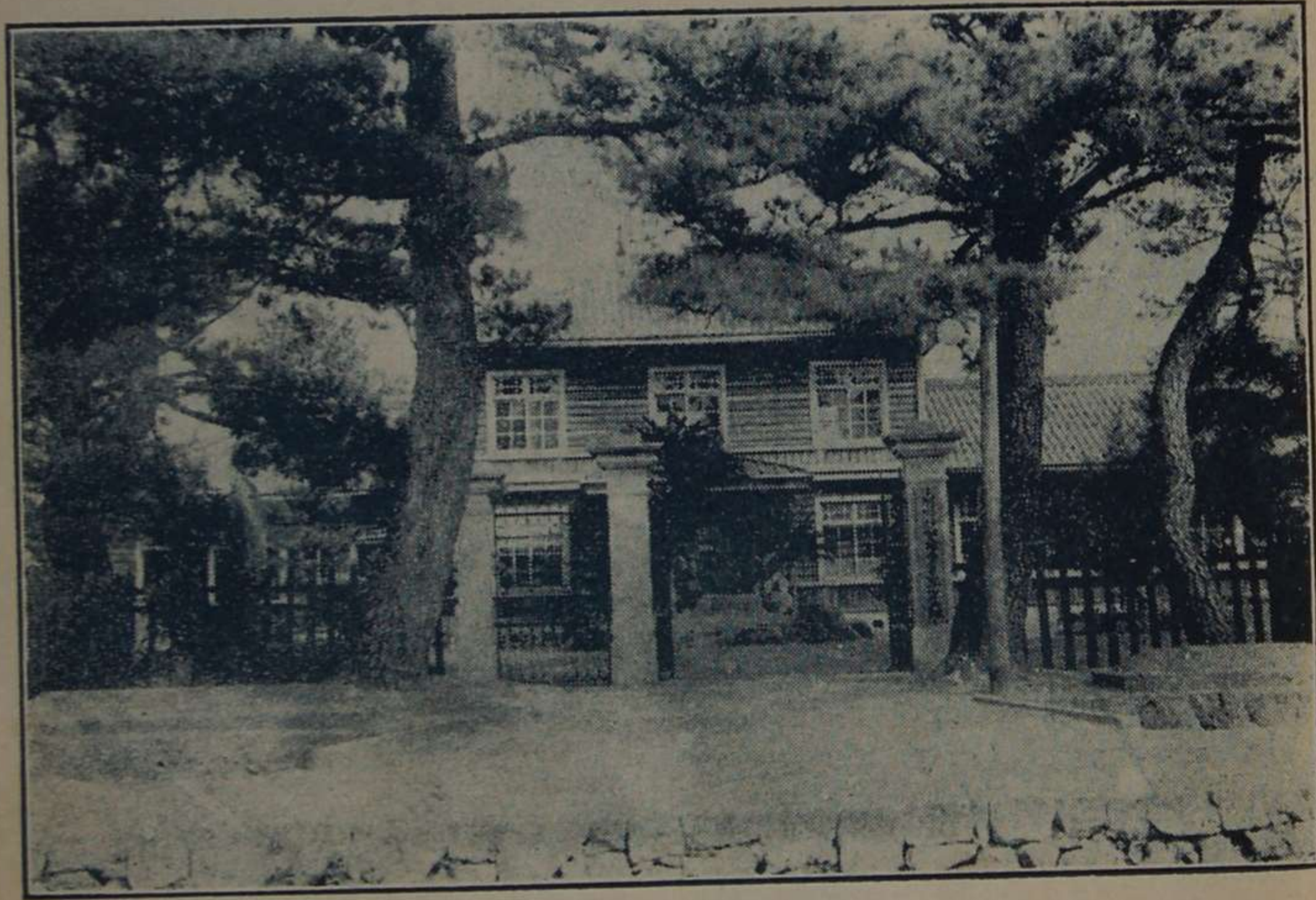
F



Y282
F7

明倫
昭和二年五月
山縣伊通

山縣公爵匾字

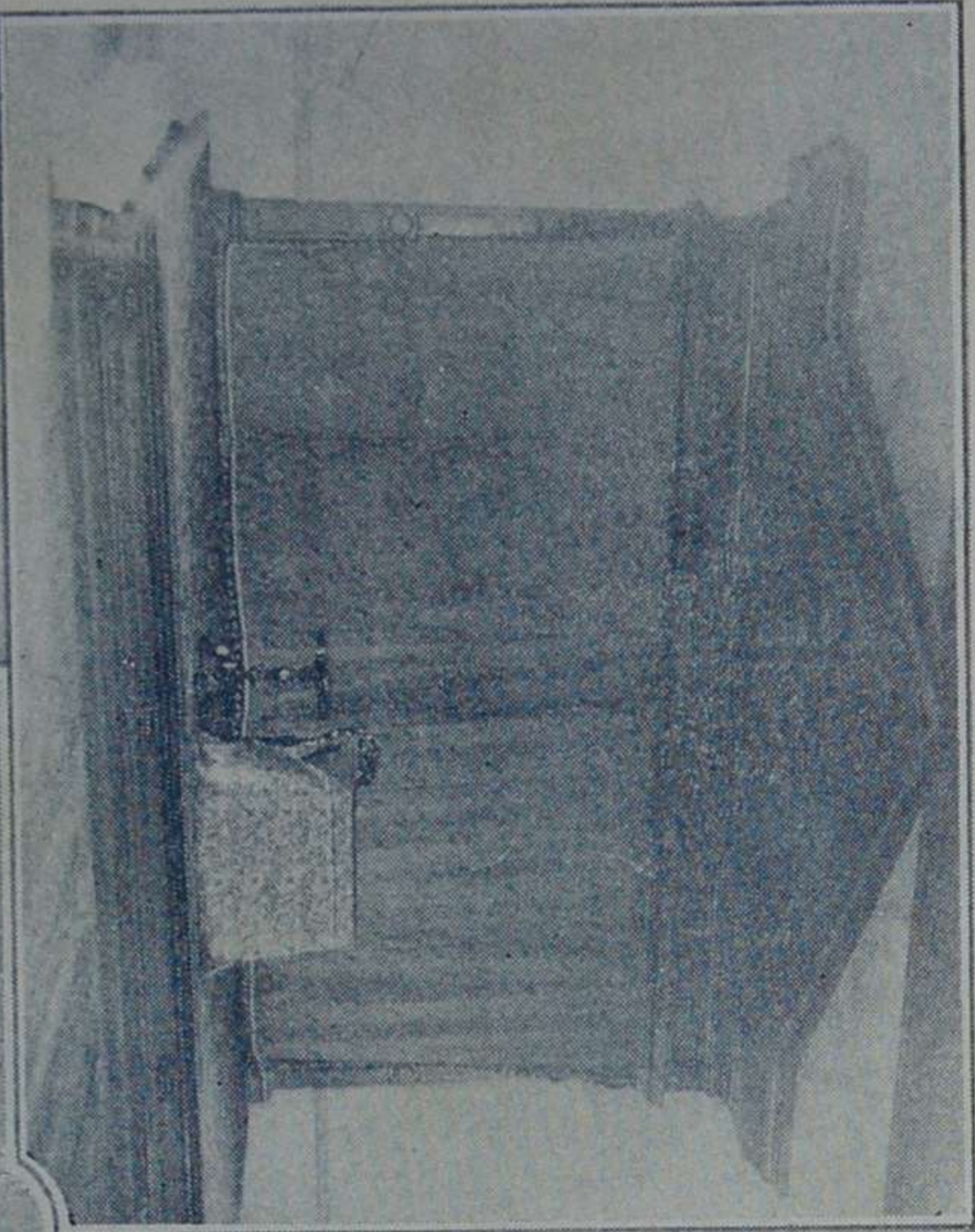
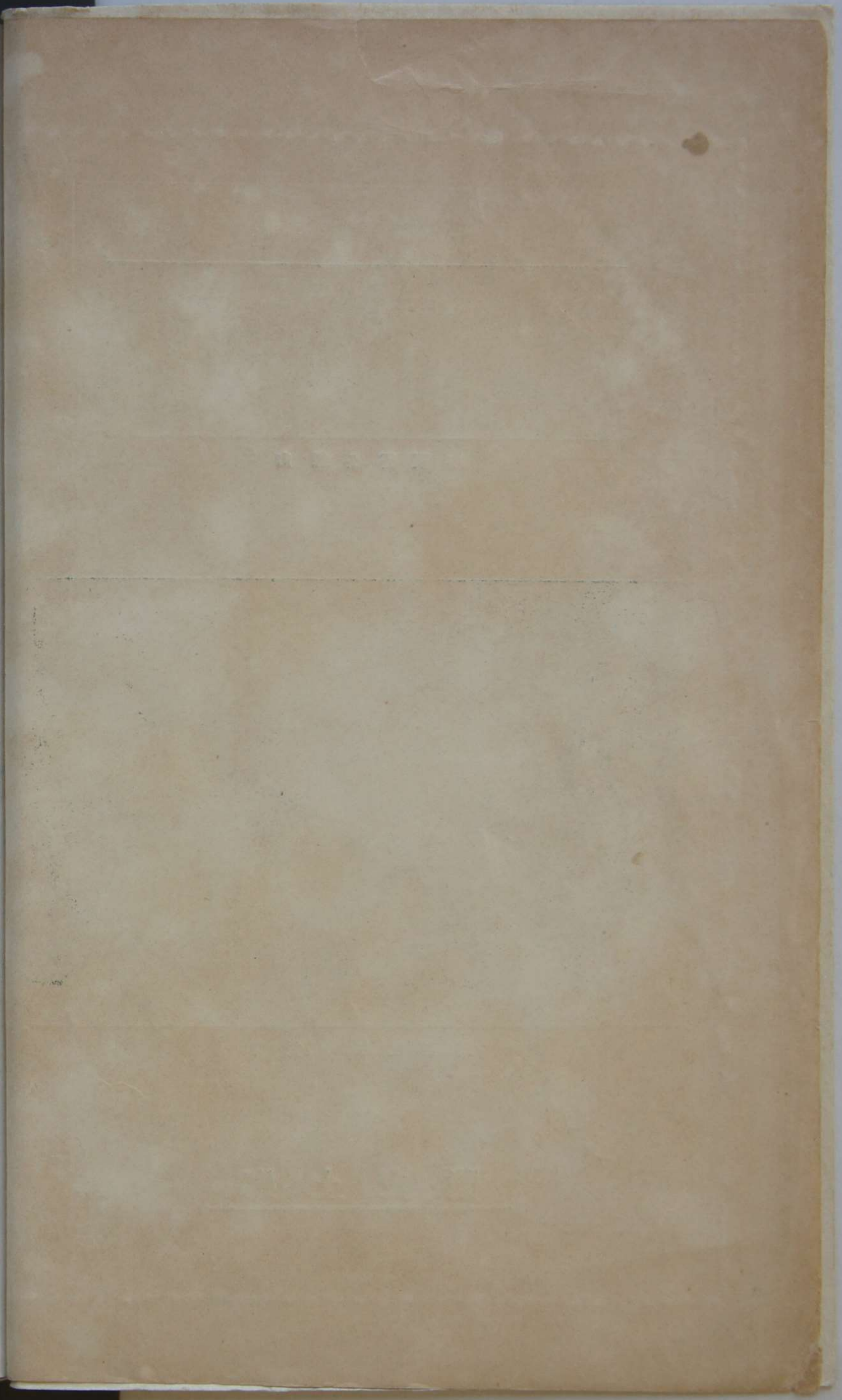


明倫小學正門

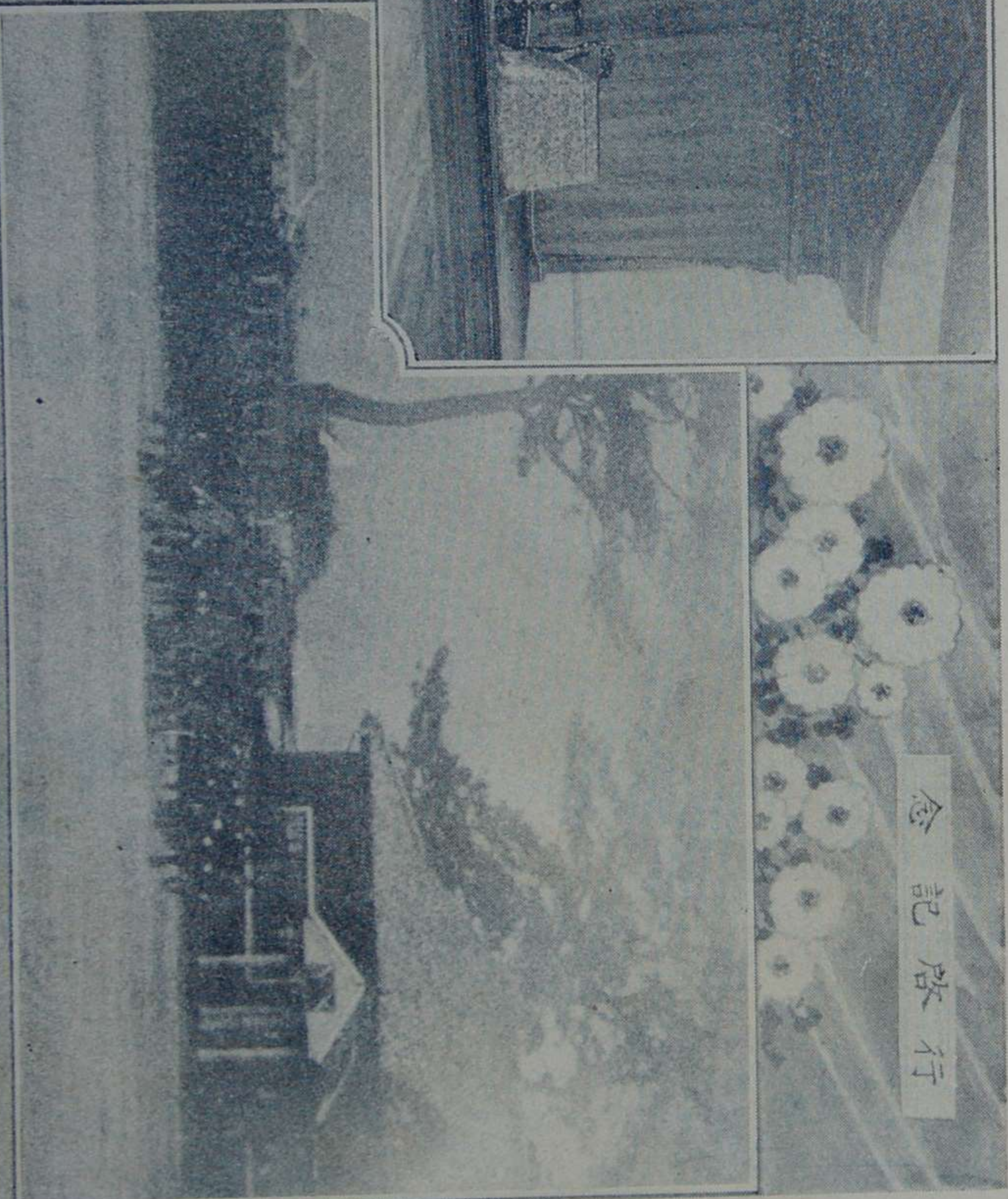
鄉土史號

33903

萩市立圖書館



(内座講校本) 座御

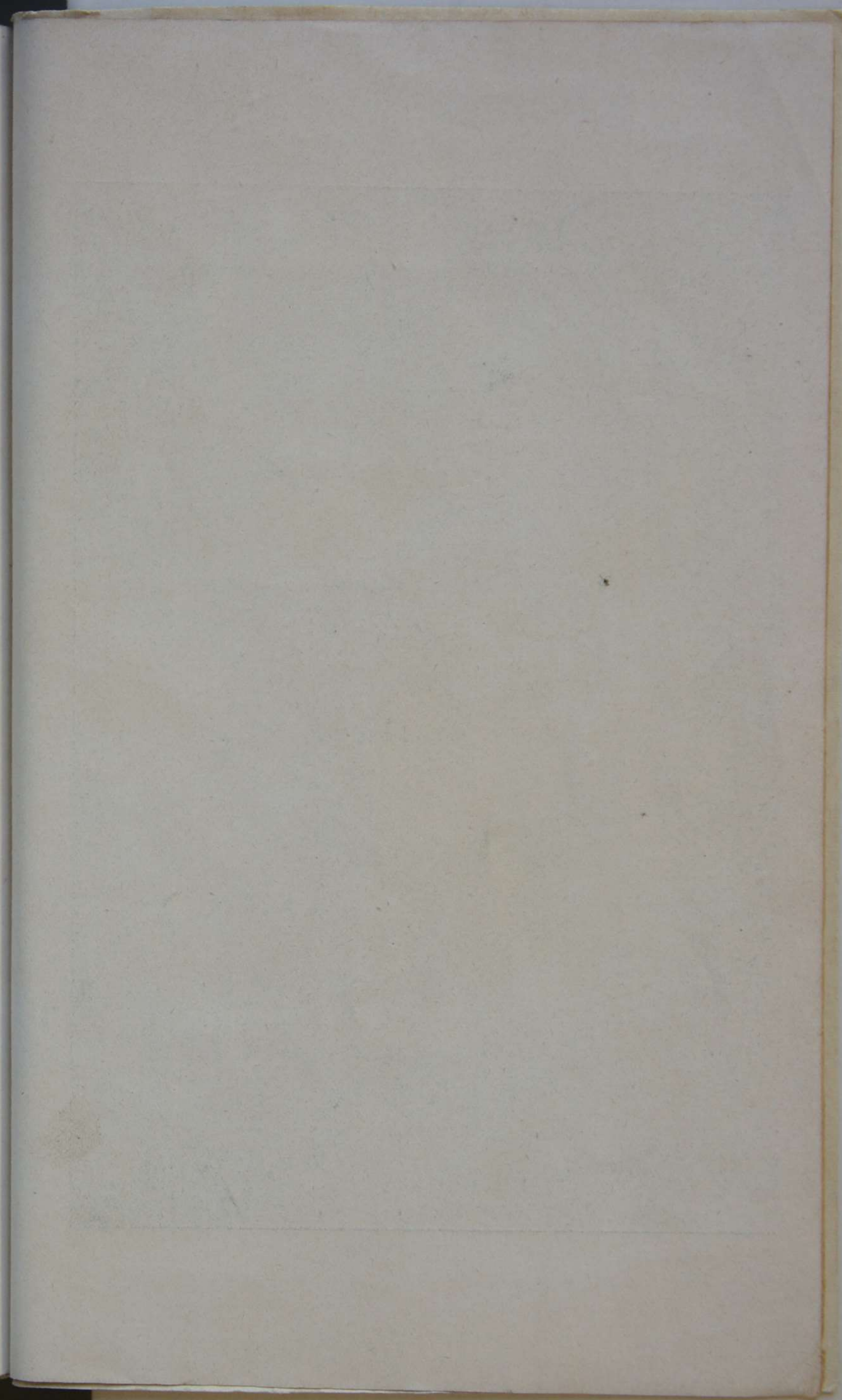


念記啓行

(日十三月五年五十正大)ヲ給セハ向ニ館備有リヨ堂身敬内校本 下殿子太皇



觀巡御園東内城菽 下殿子太皇



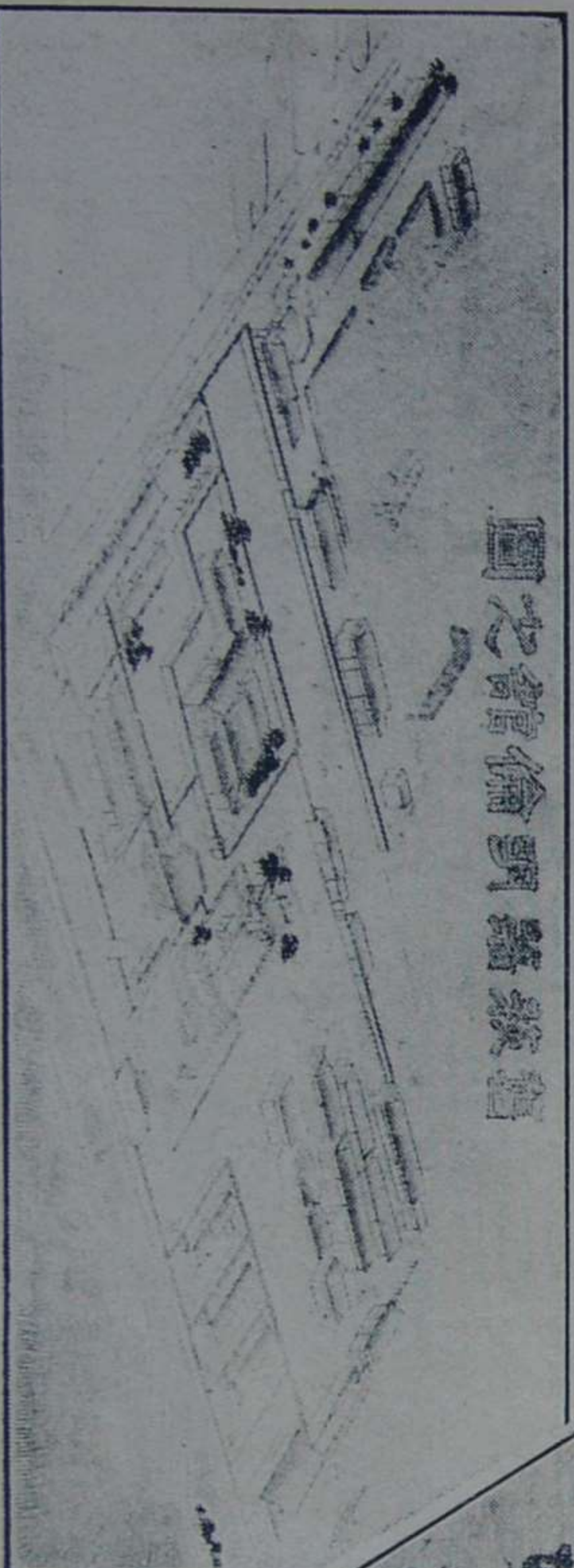
明倫館

明倫館扁額



毛利敬親

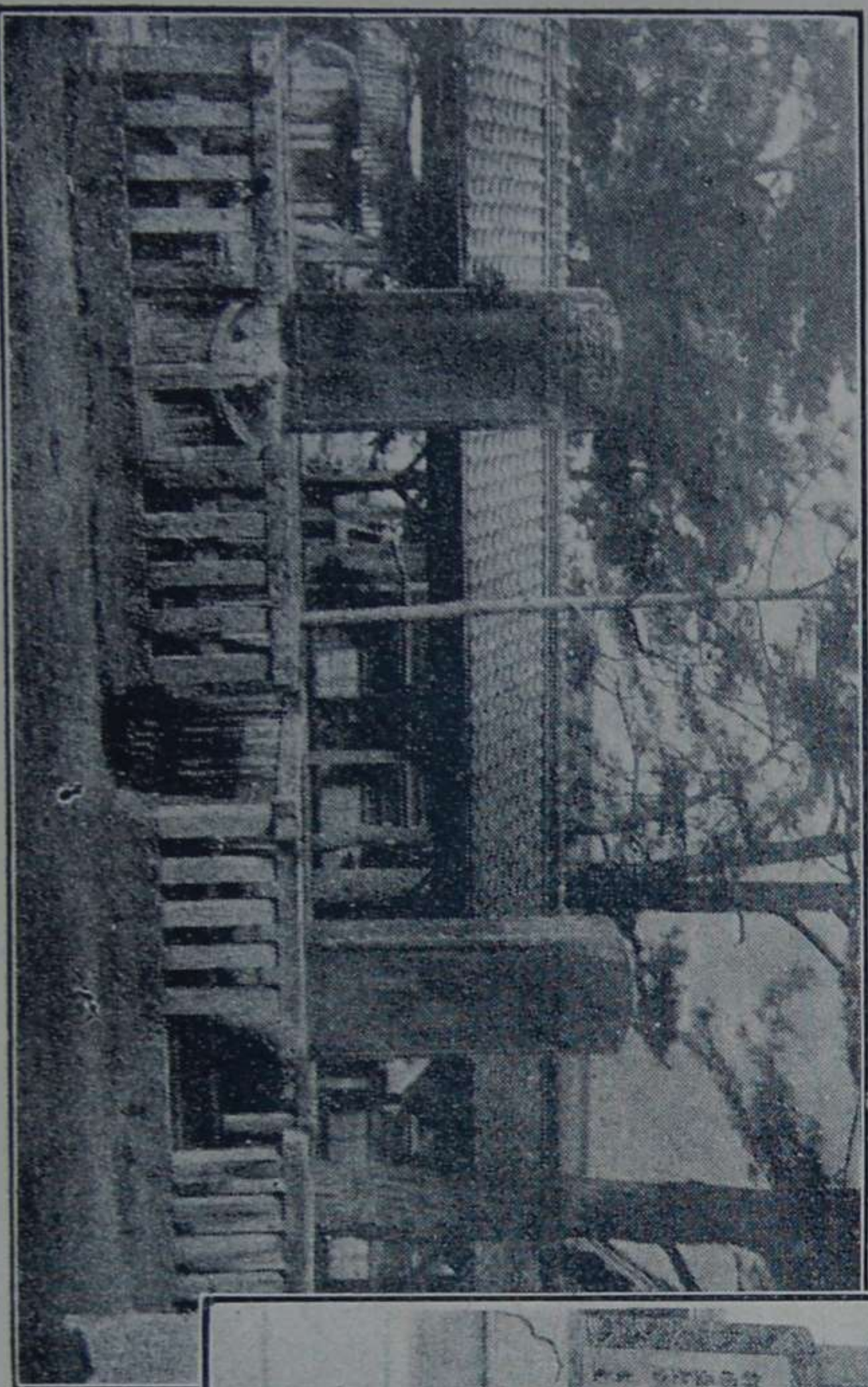
所中の事



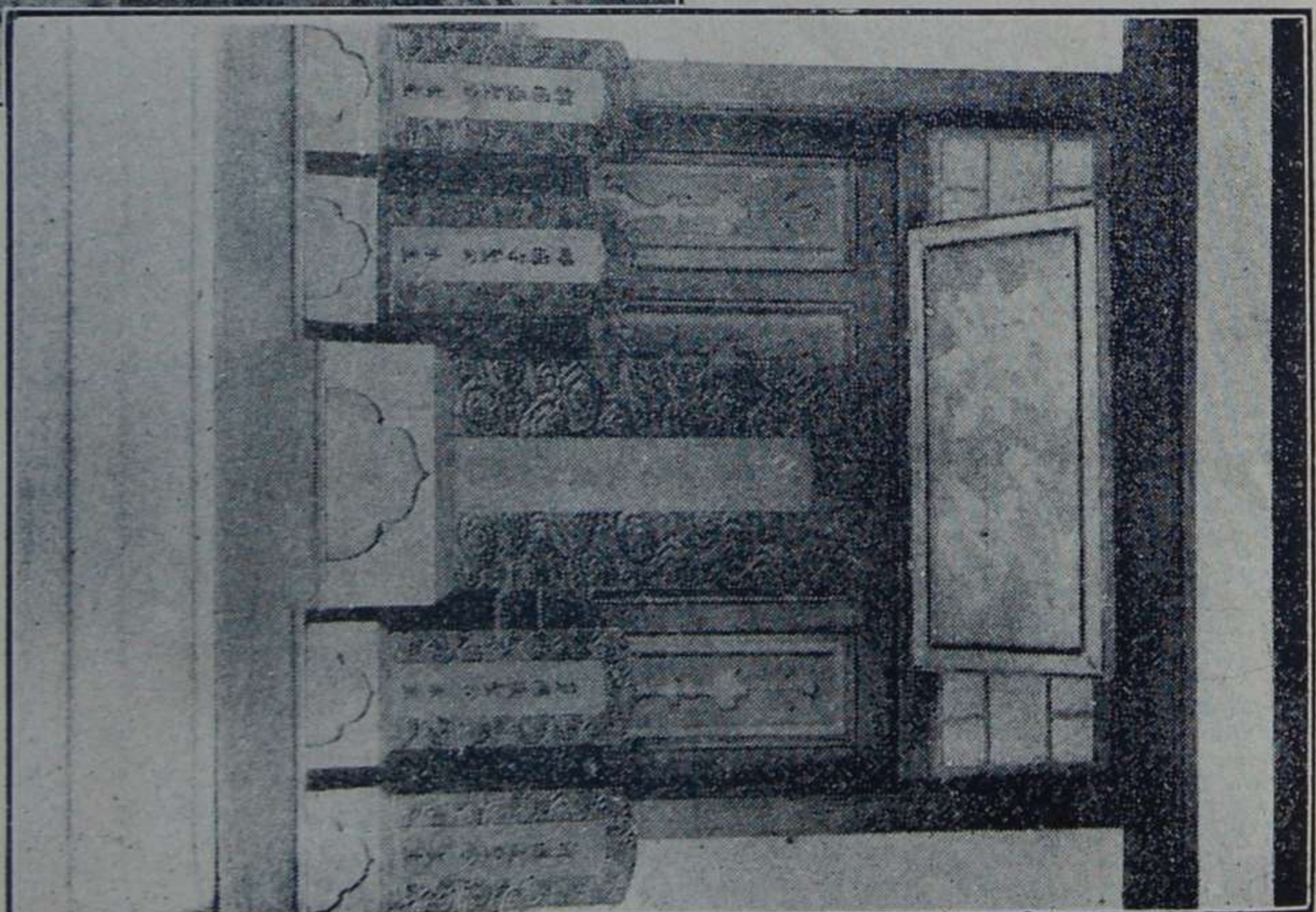
繪築明倫館之圖

重建築明倫館之圖

毛利敬親公
 文政二年二月十五日江戸麻布邸に生る 齊元公の第一子 天保八年齊廣公病あり公を養つて嗣となす 同年四月封を襲ぐや廢れる財政の整理癉弊せる民力の涵養に主力を注ぐ 十一年八月諸臣の直言を求め諸般癉弊の改革を期す 同十四年四月兵を羽賀臺に關す 他日二州揚武の功績實に此に基づく 弘化三年明倫館の再興を謀り人才育成に意を輸す 其の後米糧渡來と共に國事益々多事 文久三年四月居城を山口に移す 尋いで元治甲子京師の變外艦の下關來襲四境の戦等の大事に遭遇し終に克く維新の大業を翼賛す 明治元年六月 天皇親しく公を咫尺に召し諭言を賜ひ 二年六月勅して 其の功績を賞し給ふ 同四月退隱す 四年天竺岩倉具視山口に來り宸翰を傳ふ 同三月二十八日俄に薨す 享年五十三山口香山園に葬る 薨するに先ち元徳公を枕頭に召し上表の意を筆録せしむ 言々至忠を極め人をして感泣せしむるものあり



明倫館新舊石碑



明倫館賢聖堂主木

(明倫館中文本明説)

誠
 志
 心
 唯
 至
 志
 在
 身
 無
 毫
 不
 忘
 悔
 人
 仁
 恕
 加
 君
 子
 福
 壽
 攸
 天
 賜
 也
 名
 實
 實
 誠
 志
 一
 行
 江
 漢
 不



風 清 田 村

志
 天地大德君父至恩報德以心
 須思以身啗日難再坎生報法
 以事不終以身不息
 齊東野語



陰 松 田 吉

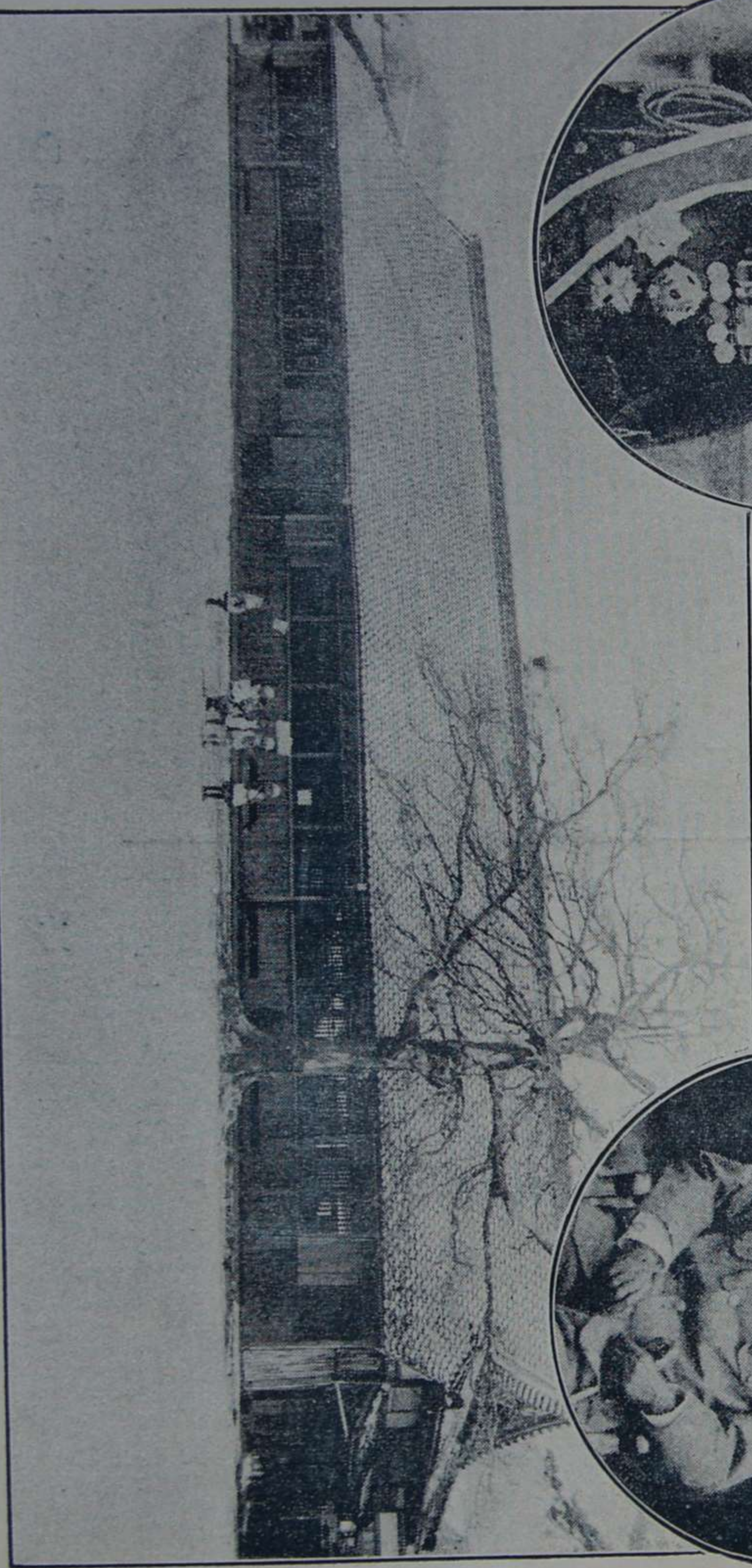
村田清風

大津郡三隅村の人弘毅俊爽學定主する處なし 經世を以て志みなす 疏通該博大旨を求め大義に通ず 二十七歳より毛利齊房公以後敬親公に至る五君に歴仕し前後三十七年 内外極めて困随多事の時に當り防長の財政を整理し克く八萬貫の債敵に當り 明倫館を再興して教育を改革し階級打破を斷行して人材登用の途を開き造士法の改新藩士の財政整理羽賀臺の閔兵等を献策して武備を更張し此に防長二州飛躍の基を確立す 歳六十三退いて三隅に歸るや山莊を講學演武の場に充て 尊聖堂といひ郷黨の子弟を教養す 安政二年命に應じ復た起つて政治の革新に當らんことをや乘輿のまゝ入城を許さる 其年五月二十五日暴に病死す 年七十三其の地に葬る

國歩艱難策未成 忘身聊獻野芹誠 才疎萬事違人望 德薄多年背世情 皎月門前誰碎石 芳梅離外渠斬楹 撫松只託千秋後 有問清風答我名

吉田松陰

杉百合之助の第二子 母は瀧子 教を叔父玉木文之進に受け家學を明倫館に講じて 藩公の親試を受けし事屢しなり嘉永元年十月明倫館再興に關する意見を奉り 嘉永二年二月十八日其の新築成るに及び章服並に金を賜ふ 松下雖陋村 誓爲神國幹とは彼學生の抱負にして安政三年七月より二ヶ年半十八疊半裡に於ける教育の標的も亦此の熱烈なる國家精神にあり赤誠犠牲は彼生涯の信條にして至誠不動分自古未之有の語によりて其言動を一貫す 立志擇交讀書は彼が修養の基本とする所土規七則の終に右土規七則約爲三端曰立志以爲萬事之源擇交以輔仁義之行讀書以稽聖賢之訓十苟有得於此亦可以爲成人矣と身自らが實行の範を垂る 門下偉才を輩出する真に故ある哉 安政六年十月二十七日小塚原に斬らる初其の屍を同地回向院に葬りしが後久阪高杉伊藤品川等之を荏原郡世田ヶ谷に移す享年三十偉績略説し難し



【典希木乃】

(場道武館倫明)

館

備 有

【明有縣山】

山縣有朋

五歳にして母に別れ寂寥の家庭に育ちしも父三郎の周到なる教育を受け明倫館に入りては文武の道に精勵す 二十歳の時伊藤公と共に京に派遣せられ國事に奔走し天下の志士と交る其年歸藩し松陰の門下に入る二十六歳の頃奇兵隊の軍監となり高杉の參謀として活躍す 明治三年歐州を視察し歸朝後大村の後を繼いで我兵制の創設に盡す 徴兵制度の如きは最も大なる決心と苦慮を要したるものなるべし 明治六年陸軍卿に陞り參謀となる 西南の役征討軍の參謀長として盡す 役後より或は參謀本部長として陸軍の改革に或は内務大臣として自治制度施行の準備に當る 明治二十二年内閣總理大臣となる第一回の總選舉は此時に行はる 三十一年元帥號を賜はり再び大命を帯びて内閣を組織す 又樞府議長となり元勳中の元勳として鞠躬輔弼の大任を全うし大正十一年二月一日薨去 享年八十五 國葬を以て小石川音羽護國寺に葬らる

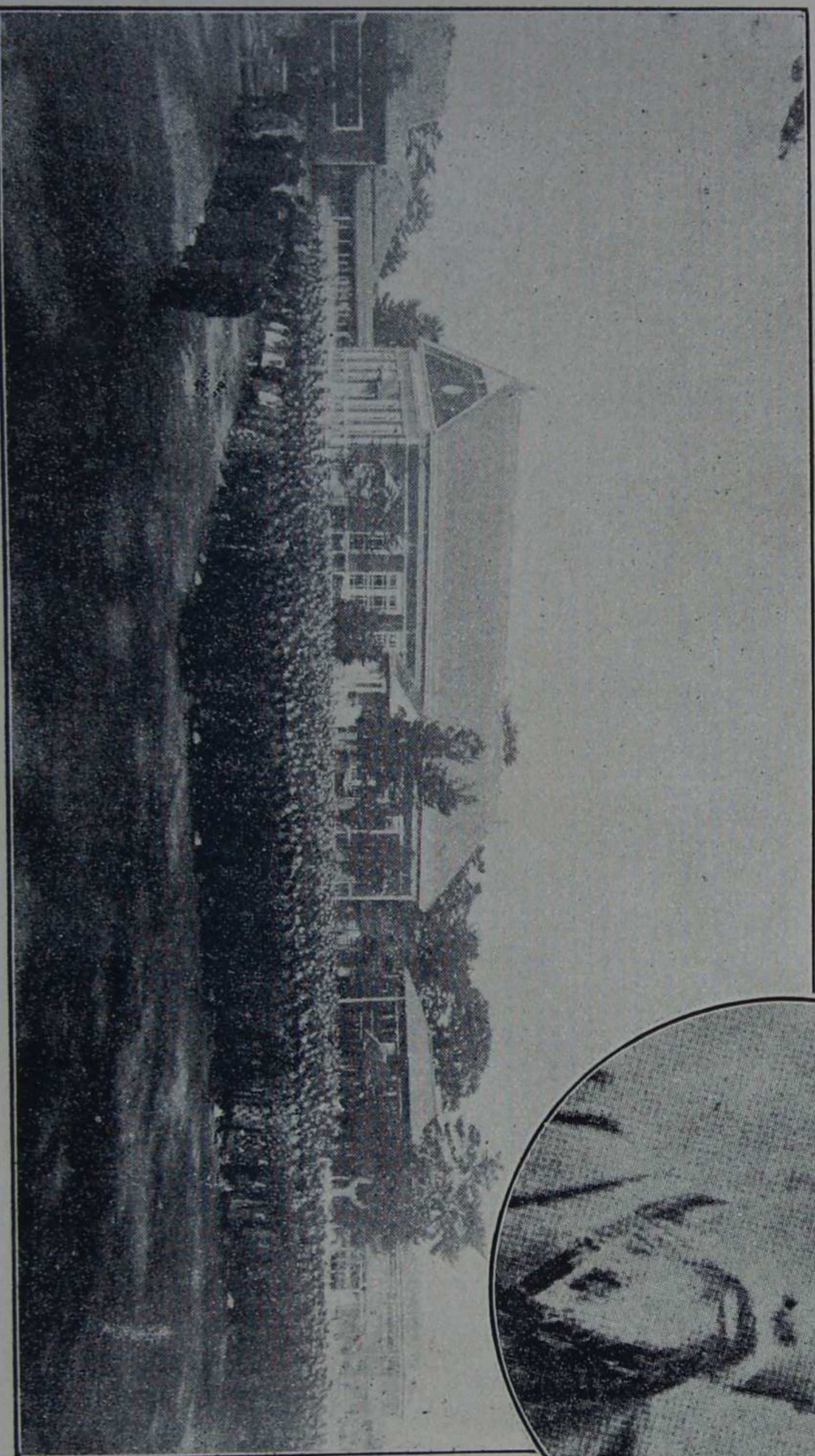
乃木希典

長府の人十郎希次の長男 母は長谷川氏 嘉永二年十一月十一日江戸麻布邸に生る 少時松陰先生と同じく玉木文之進に師事し後明倫館に學ぶ 六十四年刻苦精進常に身の及ばざるを恥づ 三十五年間死處を求めて終に之を先帝の殉死に得たり 人格の美勳績の大行動の壯言語に絶す眞に 大正元年九月十三日午后八時は長へに國民の腦裏を離るゝ能はざる印銘の日なり 作間鴻東氏の三典歌を附記して將軍壯美の風格を偲ぶ 阿兄勝典勇拔群 阿弟保典武兼文 乃父將軍名希典 一家三典悉從軍 將軍發日告遺志 武夫捨命尋常事 一人戰死勿出棺 留一旦待兩個至 果然南山激戰時 冒險奮闘失長兒 敵彈無情旅順役 又爲乃木折一枝 接報將軍色不動 將軍不痛聞者痛 守棺夫人感如何 夫人不慟國民慟 君不見嗚呼忠臣三楠公 殉難報國闔門空 壯烈古今堪相比 三典獻身取遼東



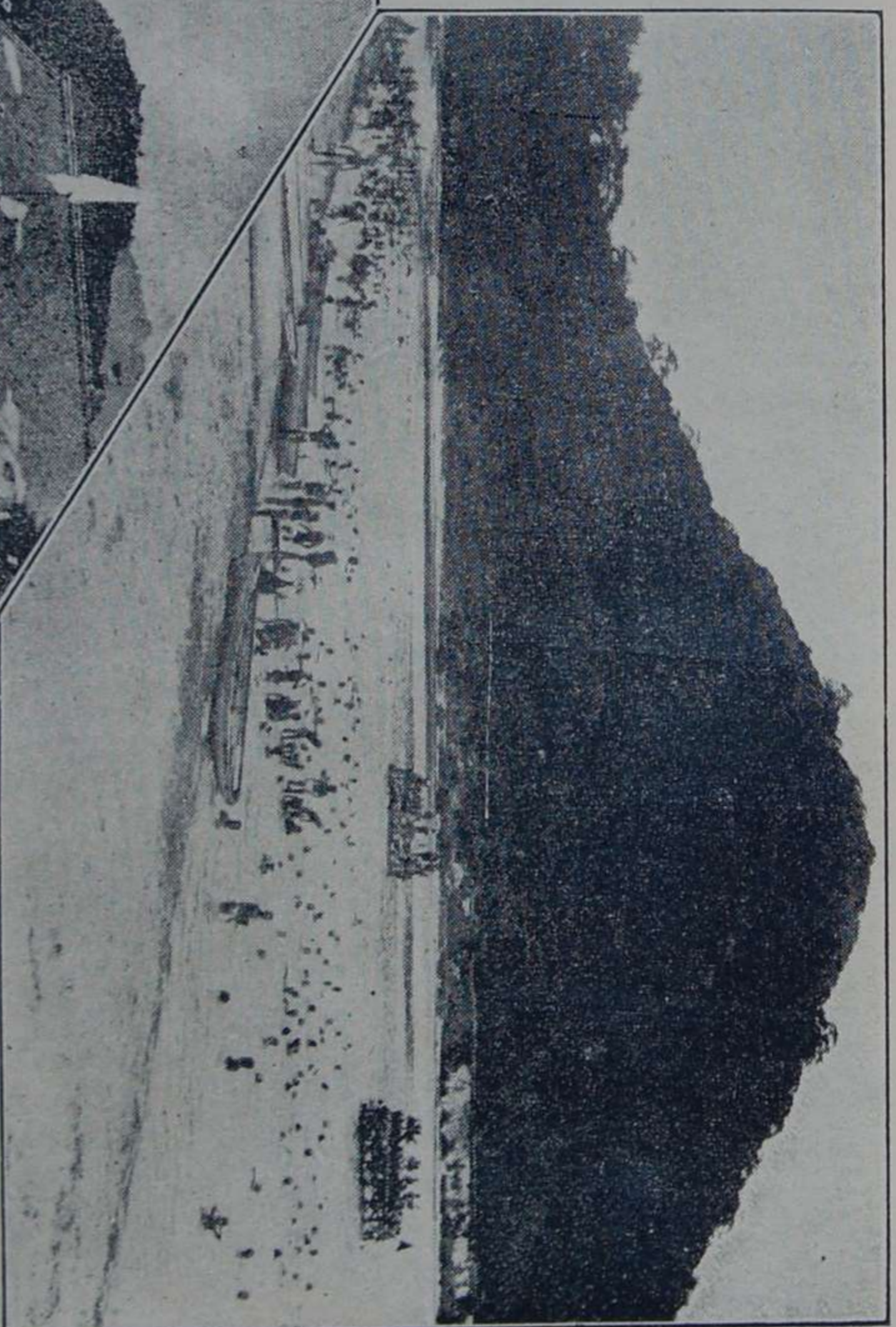
(日五十二月十年二和昭)

訓相資中田

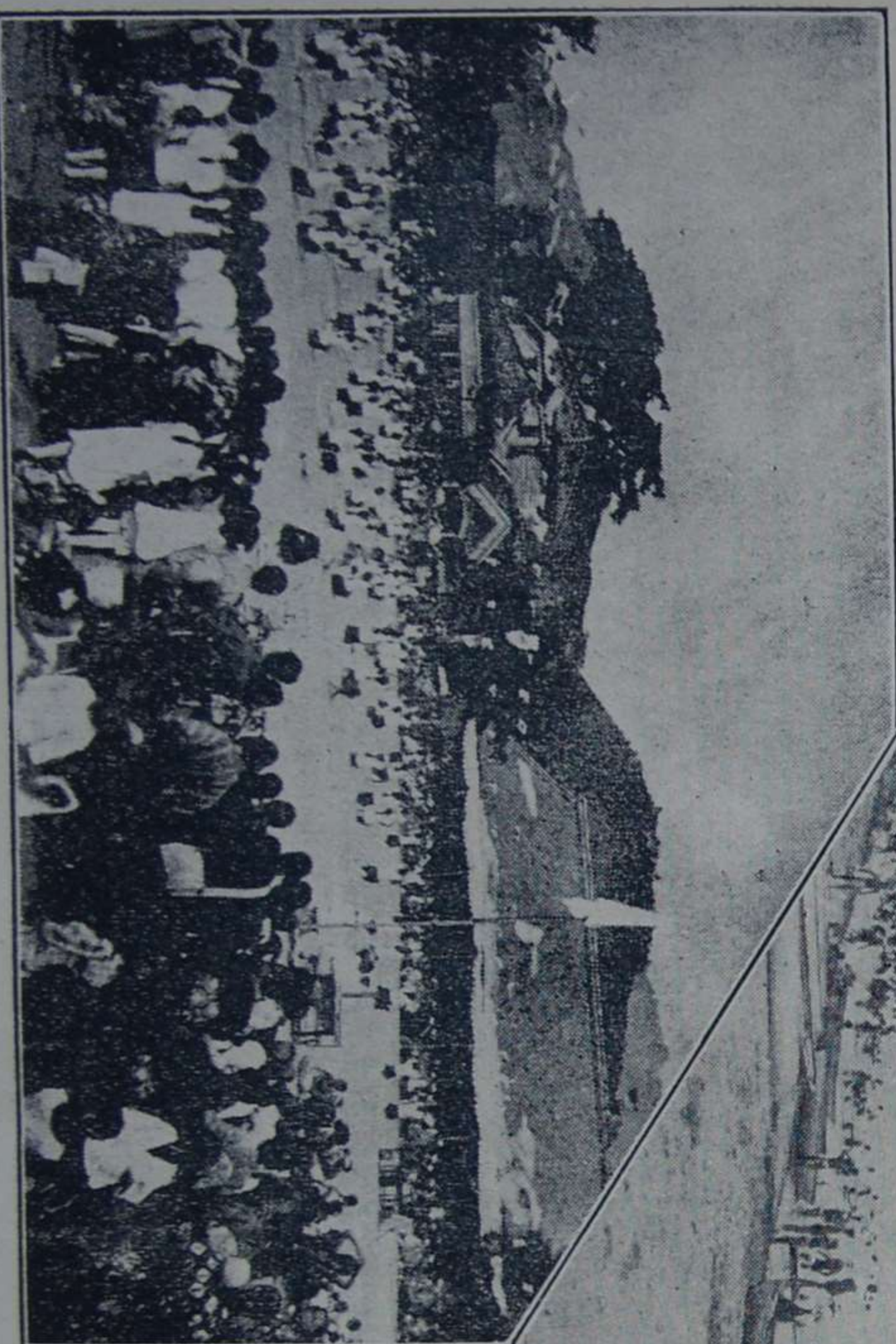


初代校長
贈從四位中村雪樹
(中村雪樹氏履歷功績本文参照)

本 校 朝 會 (現 時)



會 泳 游 校 本



會 動 運 校 本

發刊の辭

萩の地が人文史上重要な地位を占めるやうになつたのは慶長九年輝元公入城以來の事であるが歴世名君賢臣相踵いで現れ大いに文教を興して大義名分を顯揚し武道を奨めて剛健敢爲の士風を啓培し産業を盛にして士民の福祉を圖り財力を蓄積し以て彼の幕末の國難を打開し維新回天の大業を翼賛したのであつて志津岐城趾松下村塾はいふまでもなく各所に點在せる史蹟の一木一石にも崇高神の如き至誠と熾烈火の如き熱情との面影が躍動してゐる。

我が明倫校の地たるや長藩治政の樞中核心として最も意を輸し力を盡された文武兩道練磨の學府の跡であつて現存せる遺物はいふまでもなく颯々たる四周の松籟にも當年の雄圖を追想して感奮禁じがたく生を此の地に享けこの校に學び父祖先輩の偉大なる業績を顧み崇高なる風格を偲ぶ者をして一種いふべからざる感激と矜持とを有せしむると共に子孫後進としての使命責務の重大なるを覺わしむるのである特に客年五月三十日 皇太子殿下の御臺臨を忝うしたことは眞に光榮の極である仍つて此の光榮を永久に記念すべき事業の一として校友會誌を發刊することとし其の第一號として郷土教育史料を揖録したものが即ち本誌である。

一致協戮忠誠奉公は藩祖百萬一心の大訓以來一貫した根本精神であつて同化包容進取建設は斯の大精神を發露活躍せしむるために持し來つた態度であると思ふ吾人は慢に過去を謳歌し歴史に陶醉して自ら固陋消極に陥るなからんことを期するのみならず此の傳統精神に立脚して郷土の實相を内省批判し趨嚮を洞察しつゝ進んで新時代に順應し新文化の建設創造に努め以て邦家社會に貢獻することが偉大なる先人の遺志を繼ぐの所以であり光輝ある歴史をして生々發展せしむるの途である仍つて本誌としても第二號以下に於ては更に史料の増補をなすと共に郷土並に本校の現實を披瀝し將來に對する抱負を述べたいと思ふ。

目次

學校經營概要	一
一、萩町現勢	一
二、明倫小學校經營概況	二
三、明倫小學校施設一覽	三
四、明倫小學校重要年中行事	四
五、校外教授並修學旅行實施細目	五
六、現在職員一覽	六
本校沿革	一六
一、學制頒布前	一六
二、學制頒布後	一七
三、明倫尋常高等小學校	一八
四、歷代校長一覽	一九
五、中村雪樹先生行狀	二〇
長藩文教の一斑	二一
一、明倫館教育	二二
二、明倫館史蹟	二五
三、明倫館現存遺物	二六
四、明倫館學頭	二七
皇太子殿下行啓奉迎記	二八
一、皇太子殿下本校奉迎記	二九
二、皇太子殿下本校行啓日誌	三〇
三、兒童の奉迎文	三一
維新前後に於ける郷土關係の志士及名士	三二
附 墳墓一覽	三三
故人の遺志：香川政一氏寄稿	三四
田中總理大臣を迎ふるの記	三五
雜錄 <small>(本校名士一覽、修學旅行團一覽、本校講堂を利用したる會合一覽)</small>	三六
山縣公爵の薨去を悼む	三七
編輯を終て	三八



學校經營概要

一、萩町現勢 (昭和二年度)

一、廣袤	東西 二里二七町	南北 四里一六町
二、人口	五、〇二方里	
三、戶數	三万三千人	
四、租稅	六五八七	
國稅一戸當	一四・三八一圓	
縣稅同	二〇・六一〇圓	
町稅同	三四・二九三圓	
經常費	二一八・八三六圓	
臨時費	四一四・九九〇圓	
七、生業		
農業	二・七六五戸	
商業	二・二六五戸	
漁業	九八四戸	
工業	一七〇戸	
其他	四〇三戸	
八、教育機關及教育費		

教育費總額

商業學校	一校	經常費	一五二、三五四圓
小學	六校	同	二九、三四三圓
實業補習學校	六校	同	一一五、〇四六圓
青年訓練所	六	同	二、六二三圓
圖書館	六	同	三、三二七圓
青年團	六	補助	二、〇一五圓
青年會	六	同	八〇〇圓
婦女會	六	同	二四〇圓

二、明倫小學校經營概況

(昭和二年度)

一、學級數

尋常科 各學年六ヶ學級 三六
 高等科 高一 四學級 高二 三學級 七
 計 四三

一、兒童數 (現在就學兒童數)

學年	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二	計
男	一八二	一六七	一七七	一六四	一五三	一六三	一〇四	六九	一一七九
女	一九八	一七一	一七〇	一六五	一四五	一六〇	一〇一	六三	一一七三
計	三八〇	三三八	三四七	三二九	二九八	三二三	二〇五	一三二	二三五二

一、教員

職名	男	女	計
本科正教員	二六	二〇	四六
專科正教員	一	二	三
補助教員	二	二	四
計	二九	二二	五一

一、經費

イ、經常費

1、給料 四六、一六六・八五圓
 平均支出額 三五、〇一六圓

2、雜給 五、一九一・六圓

3、需用費 三、九三九・二五圓

4、修繕費 一、一〇〇圓

5、雜費 九二〇圓

ロ、臨時費 三、三八〇圓

備考 町費ノ額

町費ニ對スル歩合(萩町) 〇・四三

一戸負擔平均費 (明倫) 一四・五一圓

學童一人當リ (明倫) 二〇・八〇圓

三、明倫小學校本校施設一覽

一、教授

1、教授方針

- イ、全我活動と補導經濟との調和
- ロ、時代思潮と郷土精神との融合
- ハ、主眼の徹底と应用能力の啓培

イ、準備的的確

- 學習指導の計畫
 - 學習環境の整理
 - 歡喜的自覺活動の鍊成
 - 表現出の鍊達
 - 個性適應と特別指導
- 教授細目編成：郡教育會共同期成
 教材進度豫定案：各學期始調製
 學習指導案：週一回學年主任月一回校長檢閱
 學習氣分の喚起
 參考資料の揭示

2、教授施設

- ロ、過程の指導
- ハ、結果の考察—成績考查、學藝會、各種展覽會、課題、回覽

1、訓練方針

- イ、深刻強烈なる敬愛感謝の情念涵養
- ロ、勤勞愛好、健實厚重なる精神陶冶
- ハ、自主獨往、協力團結と氣風作興
- イ、國家郷土生活の訓練—祝祭日諸儀式、郷土記念日、愛國的記念日

二、訓練

2、訓練施設

- ロ、社會公共生活の實踐
 - 時間嚴守、協同生活、校外監護、公共物愛護
 - 左側通行、敬老會、自治會、當番制度
- ハ、經濟觀念の涵養—學用品の經濟、勤勞作業、學園の手入、校舍校具愛護
- ニ、醇正なる感情陶冶
 - 清潔整頓
 - 言語行爲上
 - 心性陶冶
 - 情操學科の重視
 - 情操的施設
- ホ、訓育結果の省察
 - 定時檢閱
 - 家庭訪問
 - 保護者懇談會
 - 尋常科第一學年
 - 尋常科第六學年
 - 一般

1、養護方針

- イ、運動氣分作興と体育趣味の養成
 - ロ、運動要領確得と有爲的體育振興
 - ハ、訓育的体操と規律の嚴正
 - ニ、衛生思想の涵養と相互鍛練
- 体位の向上—体操の自覺尊重—家庭体操の獎勵
 体操會、競技會の實施

三、養護

2、養護施設

1、身体的鍛練

課外運動の奨励(野球部、庭球部、競技部)
運動會(十月十日)
遠足(定時五月)
夏季游泳講習會
劍道(寒稽古)
五年以上對抗競技(野球、競技)

2、養護施設

身体検査ト、ラホーム治療
寄生虫驅除、種痘、豫防注射
衛生曆、衛生週間、學校衛生デー
救急治療
教室に於ける衛生的注意(机、腰掛、黑板、通風、採光)

1、職員服務

- 1、職員服務規定遵奉—法規、本校條規
- 2、職員會 (協議會(指示、注意協議)
研究會(教育事務打合)
報告會(學事視察、研究狀況報告))
- 3、事務研究會
- 4、監護當番 (校內監護……監護規程
校外監護……同)

四、管理上の施設

2、事務分擔

- ホ、宿直勤務 (宿直(男教員)當直規程)
- イ、教務部 (教務係、養護係、學籍係、衛生係、教辦係、園藝係、庶務係、圖書係)
- ロ、庶務部 (會務係、整理係、設備係、圖設係、庶務係、圖書係)
- ハ、兒童門札の揭示、家庭訪問(定時五月中)
- ニ、父兄懇談會、學藝會、展覽會、運動會等
- ヘ、通知票—成績其他報導
- ホ、成績品家庭回覽—綴方、書方、圖書其他
- ヘ、印刷物配布—家庭への通知事項
- ハ、校友會

3、家庭聯絡

五、教員修養
諸施設

- 1、職務上の研究修養
 - イ、職員會……協議研究
 - 教材進度協定
 - 教材調査研究
 - 教授方法研究
 - 教辦教具の充實活用
 - 訓育養護の協力
 - 學年研究録の記入
 - ロ、學年主任會
- 2、學習研究會
 - イ、教科研究會
 - 各科研究會—研究分擔……教科本位
 - 共同研究會—一、二科目特定…學校本位
 - 指定研究會—學校毎月一回……學校本位
 - 二ヶ學年聯合共同研究會—各部毎月一回…二ヶ學年單位
 - 自發研究發表會—各員隨意……學級本位
 - 學級相互參觀—校內參觀(指定、任意)
 - ロ、實地研究會
 - 學校—毎月一回
 - 體育部—隨時
 - ハ、體育研究會—理論並實際研究
- 3、學事視察並に教育講習會
 - イ、他府縣學事視察
 - ロ、縣施設並防長教育會より派遣
 - ハ、講習會並に講演會出席

- 4、同僚會
 - イ、修養部
 - 新聞雜誌共同購讀
 - 先輩名士の講演會
 - 學科方面の指導講習會
 - 郷土史研究會—實地踏査、史談會
 - 機關雜誌「明倫教育」の刊行
 - 教員体格の向上(野球部、庭球部)
 - ロ、運動部
 - 遠足會
 - 登山會
 - ハ、懇話部
 - 吉凶慶弔(相互扶助)
 - 送別歡迎—親睦會(相互協調)
- 5、女教員修養會(要會)
 - イ、女教員間の提携融和
 - ロ、知徳の修養
 - ハ、女性としての執務研究

四、明倫小學校重要年中行事

- 印 全校行事
- 印 學級行事

國家的記念日	郷土的記念日	一般的行事
□神武天皇祭 四月三日	■春日神社祭 四月六日	■入學式 四月一日

天長節	同	廿九日	高杉晋作記念日	同	十四日	整理週	同	月上旬
海軍記念日	同	五月廿七日	志都岐山神社祭	同	十五日	身體檢查開始	同	月上旬
時の記念日	同	六月十日	毛利敬親公記念日	同	五月十七日	修學旅行並遠足	同	中旬
秋季皇靈祭	同	九月廿四日	松陰神社祭	同	廿五日	家庭訪問	同	中旬
成申詔書下賜記念日	同	十月十三日	村田清風記念日	同	廿六日	精進週	同	下旬
神嘗祭	同	十月十七日	木月孝允記念日	同	廿六日	尊時週	同	下旬
教育勅語下賜記念日	同	十月三十日	毛利元就公記念日	同	七月十六日	衛生週	同	中旬
明治節	同	十一月三日	久阪玄瑞記念日	同	十九日	水泳週	同	中旬
國民精神作興詔書下賜記念日	同	十一月十日	山縣周南記念日	同	八月十二日	體育週	同	中旬
新嘗祭	同	十一月廿三日	乃木大將記念日	同	九月十三日	運動週	同	中旬
大正天皇祭	同	十二月廿五日	中村雪樹記念日	同	十月六日	敬老週	同	中旬
新元始祭	同	一月一日	志都岐山神社祭	同	十月十五日	自護週	同	中旬
元始祭	同	一月三日	伊藤博文記念日	同	十一月一日	學藝大會	同	中旬
紀元祭	同	二月十一日	明倫小學校開校記念日	同	十一月一日	友愛週	同	下旬
祈年祭	同	三月十七日	萩開府記念日	同	十二月二日	孝養週	同	下旬
久遠祭	同	三月六日	三松陰神社祭	同	十二月十一日	武週	同	下旬
陸軍記念日	同	三月十日	二孝子祭	同	十二月十一日	新入兒童調查	同	下旬
春季皇靈祭	同	五月廿一日	毛利元德公記念日	同	一月廿五日	成績展覽會	同	下旬
			明石孝女記念日	同	一月二十日	卒業式	同	下旬
			明倫館重建記念日	同	一月廿六日	終業式	同	下旬
			山縣有朋記念日	同	二月一日		同	下旬

五、校外教授並修學旅行實施細目

學年	目的地	出期	見學場所	歸校後整理
尋一 男女	志都岐公園 菊ヶ濱	五月上旬 出發 午前八時三〇分 歸校 午後二時	香雪園銅像並藤棚 春日神社、疏水、堀 志都岐山神社、城址 台場、海岸 海草及貝類	觀察事項 話方 記憶畫
尋二 男女	椿八幡宮神苑 大照院	五月上旬 出發 午前八時三〇分 歸校 午後二時	玉江橋、玉江驛、大照院 椿八幡宮神苑、汽車 六島、日本海 萩驛、金谷天神社 萩警察署	觀察事項 話方 記憶畫
尋三 男女	松本 東光寺	五月上旬 出發 午前八時 歸校 午後二時	春ノ風物、松陰神社 松下村塾 伊藤公舊宅 松陰先生誕生地 萩全景、東光寺 製糸場	觀察事項 話方 記憶畫

尋 四	男 女	倉江海岸	出發 午前八時	清風松、鐵道線 停車場、墜道 玉江觀音院、辨天社 萩八景、洲口ノ出來方 方田園ノ草虫 海邊ノ小動物、海藻	觀察事項 感想發表 綴方 寫生
尋 五	男 女	越ヶ濱	五月下旬 出發 午前八時	前小畑二孝子ノ碑 招魂場反射爐、白山神社 砲台跡、水族館 行者ヶ鼻、休勞泉 殿島神社、笠山、六島	觀察事項 綴方 寫生 採集物提出
尋 六	男 女	深川温泉 大寧寺	五月下旬 出發 午前七時 午後五時三〇分	鐵道沿線地理 春ノ郊外、温泉 大寧寺、清風先生ノ山莊 製氷會社	觀察事項 汽車中ノ感想 大寧寺歴史研究 綴方 採集物提出 寫生
高 一	男 女	下關市	五月下旬 萩驛發 午前六時八分 下關着 九時五十五分 下關發 午後三時半分 萩着 七時四十八分	下關市、龜山神社 赤間宮、安徳天皇御陵 春帆樓、壇ノ浦 關門日々新聞社、測候所 海峽及港灣ノ狀況 乃木神社、仲哀天皇御陵	觀察事項 汽車中ノ感想 感想文提出

現在職員一覽

尋 二	男 女	山口町	五月下旬 二泊三日 萩驛發 午前六時八分 防府着 同 九時五十分 山口發 五時二十七分 乘船萩着 二時	小郡農學校、天滿宮 國分寺、毛利邸、埴田 縣廳、高商、龜山公園 博物館、香山園、露山堂 五重塔、八坂、豐榮、野田神社 四十二聯隊、寺內文庫	汽車 山口 防府 長門峽 各感想文 長門峽寫生 長門峽寫生
高 二	男 女	山口町	五月上旬 一泊二日 萩驛發 午前六時八分 防府着 同 九時五十分 山口發 三時 萩着 八時	農學校、天滿宮、國分寺 毛利邸、埴田、縣廳、龜山公園 博物館、香山園、五重塔 八坂、豐榮、野田神社、兵營 寺內文庫、大內試驗場	感想文提出

擔任	職員氏名	兒童數	研究教科	擔任事務	本校就月	本籍地	本校勤年月
校長	田中眞治		修身 算術	教務部長 庶務部長	大正一五、六 同一四、三 昭和二、三	吉敷郡山口町 福川村 萩町	一、三 二、七 〇、七
教務主任	周山熊一				昭和二、三	萩町	〇、七
庶務主任	永安豐太				昭和二、三	萩町	〇、七
尋	佐々木シヅ子	六〇	家事 体操	養護係 教辨係	大正一三、三	萩町	三、六

◆八學年主任ヲ示ス
●ハ主任係長ヲ示ス

昭和貳年九月一日現在

專	二	一	六	五
農手	仁 義 禮	仁 義 禮 智	仁 義 禮 智 忠	仁 義 禮 智 忠
櫻井武三	小村繁樹	伊藤光輝	野村忠次	大橋一夫
	三井政一	田坂孝子	木藤スエ	小田シヅエ
	六五	四八	五三	四五
●手工・理科	●讀方・農業	●地理	●唱歌・圖畫	●讀方
●教務係・設備係	●設備係・學籍係	●養護係	●養護係・教務係	●圖書係
大正一五、三	昭和二、三	昭和二、三	昭和二、三	昭和二、三
萩町	萩町	萩町	萩町	萩町
一、七	〇、七	〇、七	〇、七	〇、七

四	三	二	一
仁 義 禮 智 忠	仁 義 禮 智 忠	仁 義 禮 智 忠	仁 義 禮 智 忠
小島經彦	山縣貞一	丸見精一	宗實宗一
藤永俊助	服部貞一	久保アヤコ	溝部勝子
岩武誠	大谷實敏	陶山ミサコ	笹井フサ子
池上チヨ	服部貞一	張山ミサコ	宇佐川ヨネ
小田照子	服部貞一	張山ミサコ	宇佐川ヨネ
松林和子	服部貞一	張山ミサコ	宇佐川ヨネ
五三	五八	五七	六五
●讀方	●讀方	●讀方	●讀方
●圖書係	●圖書係	●圖書係	●圖書係
同 一、三、三	同 一、三、三	同 一、三、三	同 一、三、三
萩町	萩町	萩町	萩町
〇、七	〇、七	〇、七	〇、七

同 裁 田 淵 ヨ シ
同 尾 川 ミ ツ

家事・裁縫・作法
裁縫・家事

接待係・接待係
宿直係・接待係

大正 五、三 萩 町
明治 四四、五 萩 町

一一、七
一六、五



本校沿革之部

明倫小學校沿革一斑

一、學制頒布前

萩は舊藩毛利氏の治所にして、享保四年藩學明倫館の創設以來學事益々勃興し、長門文學は關西第一の稱あり。嘉永二年藩主敬親之を重建するに當り、好生館博習堂敬身堂及び江戸藩學有備館等之に附設し、大學小學より洋學醫學の全備はらざるなし。城下風を受けて、手習場私塾の開設甚だ盛にして、岡本成章の學時習齋、門田翠の精一堂、中村鼎の育英塾、繁澤光太郎の繼居學舎等は漢學を以て鳴り、木村藤太の時術齋、狩野政輔の榮松堂、大津訓の切磋塾、永井幸輔の三省塾、波根義堅の心正堂等は手習場の著しきものなり。漢學塾に於ける岡田謙道の育英塾、中所可乘の八江學舎、益田梅村の蘆華塾、手習場に於ける村上正の時習塾等は學制頒布後に於て盛なりしものなるも學制前趨勢を受けしものなり。此の外に中島治平、桂路祐の洋學、熊野養左工門、福井圓藏の算學等あり。

二、學制頒布後

明治五年七月始めて學制の頒布あり。曰く「今より邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん」と、乃ちに全國を八大學區とし、八年一月小學の學制を定めて滿六年より滿十四年までとす。當時山口縣は廣島を本部とせる第四大學區に屬し、更に縣下を六中學區に分ちて第二十三中學區より第二十八中學區に至る。阿武郡は其の第二十七中學區に屬し、更に其下に若干の小學區を置く。明治五年冬新堀小學を萩瓦町に開く。之を阿武郡内最初の小學とす。明治六年二月一日に至り萩町内に十小學を置く。之を新學制に基ける萩町初等教育の濫觴とす、十小學の校名所在地及初任校長其他の状況左の如し。

校名	校長又は首座	位置	建物	職員	生徒數
川島小學	岡田 馨三	川島庄	寺院	三	一二二
土原小學	門田 翠	土原	民家	五	一九〇

校名	校長又は首座	位置	建物	職員	生徒數	費
江向小學	中村百合藏	江向	藩學舎	五	二七三	
河添小學	天野清一郎	三軒屋町	民家	三	一三八	
平安古小學	吉松 淳三	滿行寺筋	民家	五	二〇〇	
堀内小學	栗屋 彦麿	堀内本町	民家	三	一五七	
新堀小學	市川 文作	瓦 町	醫學舎	五	二七六	
古萩小學	村上 正	古 萩	民家	三	一〇四	
五間町小學	檜崎五百輔	上五間町	民家	五	二六九	
濱崎小學	河野三千世	本 町	舊船倉	三	一四二	
計				四〇	一八四一	

明治七年魚棚小學を置き次いで新堀小學の分校とす。明治十三年河添平安古二小學を合して協和小學校と稱し又五間町小學を改めて北斗小學を置く。小學開設後町内の學事益々進み、校舎の新築亦漸次之を見る、學制頒布後十年の後明治十四年に於ける町内小學校に於ける状況左の如し。

校名	校長又は首座	建物	職員	生徒數	費
協和小學校	有倉 頼造	二階	七	二三九	〇二七、三三一
江向小學校	宇野 弘義	平家	八	二八二	二八九、九三四
堀内小學校	信國 顯治	同	五	一一三	二三七、六四〇
新堀小學校	天野清一郎	同	一	四〇六	三七九、六三三
魚棚分校	大津 訓	同	一	二二	四一、一七四
濱崎小學校	河野三千世	同	七	二六八	三三六、六五六
北斗小學校	藤井 清次	二階	六	二四七	八一、五九八
土原小學校	兼常 吉勝	同	七	一七三	二〇〇、五七三

校名	校長又は首座	位置	建物	職員	生徒數
川島小學校	室田 圭亮	平家			六一六
計					五八一、九二五

明治十五年十月江向小學校を改めて江南小學校と稱し、後更に萩陽小學校と稱す。此間に新堀小學校は涵養小學校と改め、川島土原二校は合併して校舎を新築し養正小學校と稱し、兼常吉勝之が校長となる。又濱崎小學校を廢して北斗小學校に屬せしめ、古萩、堀内、協和の諸校亦分校となれり。

三、明倫尋常高等小學校

第一期 (明倫小學開始)

明治十八年に至り萩町に萩陽(江向)、涵養(新堀)、養正(土原)、北斗(五間町)の四小學校及び協和(萩陽分校)、堀内(涵養分校)、古萩(北斗分校)の三分校あり。明治十八年七月二十八日之を合同して明倫小學と稱し、地を藩學明倫館の敷地に卜して新校舎を建つ。是より先大津郡三隅村に明倫小學校あり。蓋舊明倫館都講齋藤貞衛、藩學の廢絶を悲み、居村の學校に附するに館名を以てす是に至り縣廳は縣廳に同名の二校を生ずるを以て、萩町明倫の稱を許さず、第一小學區委員中村雪樹大いに之を遺憾とし再三縣廳に交渉し、遂に萩町に許すに明倫の稱を以てす。雪樹衆望の歸する所を以て、推されて校長となる。實に明倫小學校初代の校長なり。

第二期 (尋常小學校に高等科併置)

明治二十年四月一日學制の改正により明倫尋常小學校を開き高等科を併置す、前校長中村雪樹兼任し、首席訓導安藤紀一校事を攝

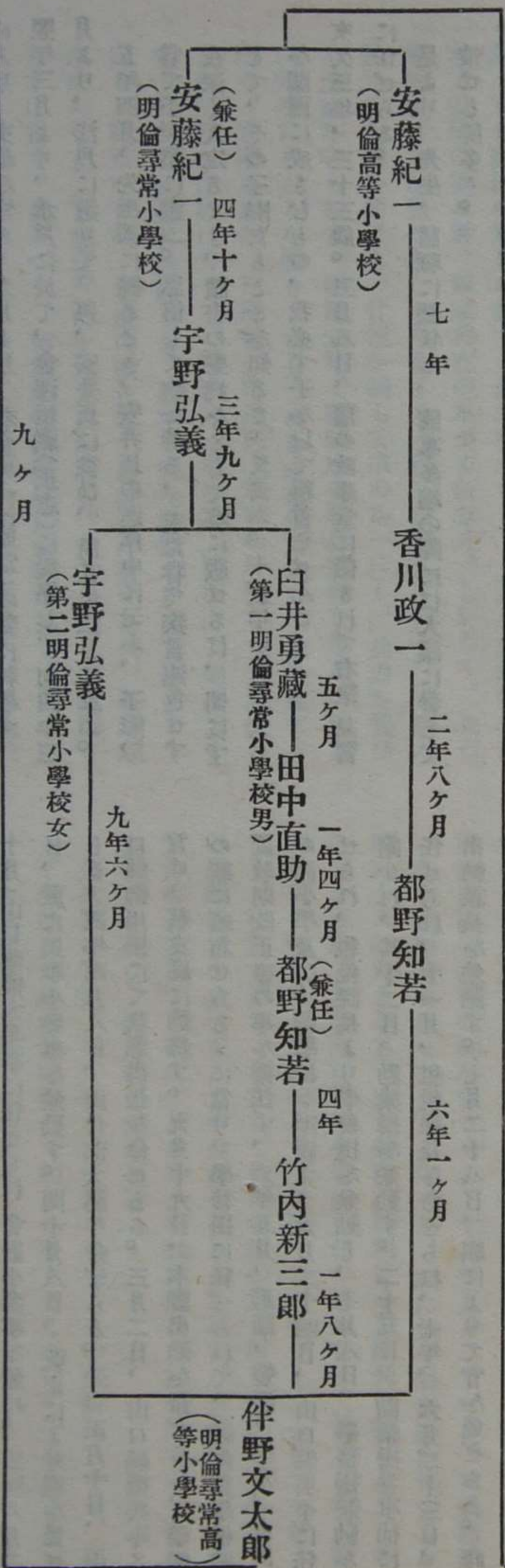
す。又別に明倫簡易小學校を開き明治二十五年九月一日之を明倫尋常小學校に併合す。
 明治二十年九月八日訓導安藤紀一校長事務取扱を命ぜらる。
 同年十一月一日幼児保育場を附設す。
 同二十一年七月十二日尋常中學校校長綿貫謙輔本校々長兼任を命ぜらる。
 同二十五年九月二十九日附屬保育場を閉す。
 第三期 (高等小學校獨立)
 明治二十六年二月十一日明倫高等小學校を開校す、是より二校なる。

安藤紀一明倫高等小學校訓導兼校長に任じ明倫尋常小學校訓導兼校長を兼任す。此年八月九日夜本校々舎火災にかゝり、教室三棟控所一棟焼失す。
 明治三十年十月六日安藤紀一の明倫尋常小學校訓導兼校長を免じ明倫高等小學校訓導兼校長に任ず。
 明治三十二年八月三十一日明倫高等小學校訓導兼校長安藤紀一、萩中學校へ轉じ、同年同月同日明倫高等小學校訓導兼香川政一、明倫高等小學校校長を兼任す。
 第四期 (三校分立)
 明治三十四年四月一日尋常小學校を廢して男女二校を設け、男子部を第一明倫尋常小學校と稱し、女子部を第二明倫尋常小學校と稱す。

四、歴代校長一覽

稱す。是より萩町小學校は三校となる。
 新設第一明倫尋常小學校長に白井勇藏(五ヶ月)、田中直助(一年七ヶ月)、都野知若(二年十一月)、竹内新三郎(二年七ヶ月)、之に歴任す。
 新設第二明倫尋常小學校長は元明倫尋常小學校校長宇野弘義之に任ず。
 明治三十四年四月一日明倫高等小學校に女子補習科を置く。阿武郡立實科高等女學校の設立は實に此補習科の變遷せるものなり。
 明治三十四年十二月二十七日明倫高等小學校訓導兼校長香川政一山口縣師範學校附屬小學校訓導に轉任す。明治三十五年三月六日都野知若高等小學校訓導兼校長に任ず。明治四十一年三月十九日又山口縣師範學校附屬小學校訓導に轉任して暫く校長を缺く。
 第五期 (一校合同)
 明治四十二年十一月一日萩町三小學校を合して一校となし、改めて明倫尋常高等小學校と稱し、伴野文太郎長野縣より來り校長に任じ、在職九ヶ月にして去り、熊本縣人松島茂之に代りて在職二年七ヶ月なり。大正二年七月九日谷井磯太郎校長に任じ在職九年にして辭し、大正十一年五月十八日桂木彦一校長となり在職一年九ヶ月にして又職を辭す。大正十三年三月居田泰輔校長となりしが在職二年四月にして退職し、大正十五年六月三十日田中眞治校長となり、以て現今に至る。

中村雪樹 (明倫尋常小學校) 二年一ヶ月
 安藤紀一 (高等小學校併置) 一年一ヶ月
 綿貫謙輔 一年一ヶ月
 安藤紀一 一年一ヶ月



松島茂 二年七ヶ月
 谷井磯太郎 八年一ヶ月
 桂木彦一 一年九月
 居田泰輔 二年五月
 田中眞治

五、中村雪樹先生行狀

中村先生、初の名は昌藏、後に誠一と稱し、尋て雪樹と改む。字は子彬といひ、栗軒又は草茵生と號す。舊長藩醫中村春岱君の第二子にて、母は、藩醫大枝端由君の女なり。天保二年正月十六日

萩平安古満行寺筋の家に生る。
 先生、幼時、吉松惣右衛門に従ひて、讀書、算術を學び、尋て、國學を山田重作に、漢學を中村伊助に學べり。學業は、實に其の嗜む所なり。

弘化三年、十六歳。正月より、劍術を内藤作兵衛に、馬術を仙波喜馬太に學び、別に、御流儀神器陣に入りて、銃陣を修業せり。嘉永三年、二十歳。藩校明倫館に入り、文武を修め、特に、兵學を吉田大次郎(松陰)より受け、國學を近藤晋一郎(芳樹)に學ぶ。同五年、藩の大組士中村保和(四郎衛右門)君病に罹り、先生を請ひて假養子と爲す。翌年保和君逝き、三月朔日、先生その遺祿を襲ぐ。時に二十三歳なり。

安政二年、二十八歳。三月、江戸に出て、安井仲平(息軒)の家塾に入り、文學を修め、九月より、羽倉外記(簡堂)の塾に轉學す。翌年三月より、水戸に於て、會澤恒藏(正志)に從學し、同四年三月より、江戸に還りて、再、安井氏に從ひ、同五年二月に及ぶ。五年四月、先生國に歸るとき、安井氏の送序中に云ふ、子彬、嘗て予が塾に遊ぶ。忠信もて物を待ち、未だ嘗て疾言遽色せず夜深く人定るとき、讀書の聲娓娓として曉に徹せるは、問はずして、その子彬たることを知る。又云ふ。十數年の後、大名を關西に成さむもの、我必ず子を以て稱首とせん。

文久三年、三十三歳。三月八日、藩の政事堂に徴されて右筆見習に任ぜらる。是より、先生、諸職に歴任し、國事多端の際には大議に參して策せし所多し。慶應元年二月、千城隊に編入せられ、四月より八月まで、同隊頭取となる。

先生出仕以來親しく交る所は、宍戸左馬介、木戸孝九、山田宇右衛門、村田次郎三郎(大津唯雪)山田亦介、中村九郎、中村文

先生少壯より國事を憂慮する念禁すること能はず、大事に臨みて、能く其意見を披瀝し建策に努め、平素の温恭に似ざるが如し、文久二年冬、幕府、列藩に布達して所思を言はしむ。長藩府、乃ち諸臣の意見を徴す。先生謂へらく、人心の聚散和否は天下安危の係る所、國家興亡の本づく所なり。しかして、先づ軍制より之を整へむことを要す。因て建議して曰く、軍制を整へて大體を明にし、什伍を編して衆心を一にし、兵力を養ひて土地を守らむ。明治元年、藩政府の執行繁雜を極め、職制の判然たらざるを慨き、三月、書を政事堂に致して策を建て、曰く、官階を加判、用所役、内用役、筆者の四等とし、更に、この四官を四職に分ちて、國政方、軍用方、國法方、國用方とすべし。議頗る納れらる。四年、書を參議木戸孝九に呈して曰く、政法の布設、制度の改正等、最注意を要するは、緩急順序にあり。今や、朝廷已に土地人民を收む。天下を變して郡縣となすに常り、成るべく、舊來の管轄區域に錯雜を起さず舊誼の存する所によりて、其人を任じ、時機の至るを待ちて、遂次、他日の純然たる郡縣制に向はしむべし。木戸參議亦頗る之を納る所あり。新舊の調和宜しきを得む、ことを努めたるもの、如し。

明治九年、四十六歳、五月十八日、巴城學舎校長を囑せらる。十一年五月、巴城學舎改稱して、山口中學校分校となり、十三年六月、獨立して、萩中學校と改稱し、先生其度毎に、校長に任ぜらる。十六年十二月、文部省より、教育の功を賞せられ、六國史一部視籍一個を下賜せらる。十七年二月、萩中學校は、復、山口

右衛門、宍戸環、杉民治等にて皆知名の士なり。宍戸環曾て先生を評して曰く、君性沈毅にして善く謀る。公亦信任して之を疑はず。余常に左右に侍す。因てその詳を知るを得たり。公は藩主忠正公を謂ふなり。

明治元年、三十八歳、藩官制改正により、御用所役を命ぜられ、専ら國政變更の事務に執掌す。十月十九日、參政を命ぜらる。二年二月十二日、東京出張中集議院議員兼務を命ぜらる。蓋、當時勅使萬里小路卿の歸洛に扈從し、遂に東京に移役せるなり。同年十月、山口藩權大參事に任ぜられ、會計小參事を兼ね。三年六月二日、更に民事小參事を兼勤す。閏十月八日、改正により職を免ぜらる。四年四月八日、山代部大屬を命ぜらる。五年正月十日、山口縣御用掛にて萩部出張を命ぜらる。三月二日、山口縣權典事となり、萩支廳に勤務す。九月十九日、本廳出勤を命ぜられ、學制の新に頒布せらるるに當り、學務掛に任ぜられて、縣内諸學校廢置教則改正等の事を擔任す。六年五月、馬關、豊浦、清末、吉田の諸小學及び、醫學校を巡視す。六月二十四日、山口縣典事に任ぜられ、租稅課長より學務掛を兼勤し、七月八日、學務掛兼勤を除かれ、其十二日、勸業掛を兼勤す。二十五日、勸業掛參事補に任ぜられ、十一月、租稅課長を命ぜられ、七年、六月二十三日、出納課長を兼勤す。七月二十八日、願によりて官を免ぜらる。時に四十四歳なり。

先生人爲り恭謙、常に、温顔を以て人に接し、部下に對しても、言動極めて丁寧なり。部下その徳に服し、各、誠意を以て事に從ひ、累を先生に及すなからむことを努めたるがごとし。

中學校の分校となる。先生、其時、三等教諭に任ぜられ、萩分校幹事を兼ね。其年九月二日、願に依り職を免ぜらる。先生の中學校を幹せし、約九年なり。

明治十七年九月二十五日、山口縣御用掛を命ぜられ、勸業課勤務士族授産掛阿武郡在勤を命ぜらる。十八年五月二十一日、阿武郡第一小學區學務委員となる。二十六日、願に依て縣御用掛を免ぜらる。明治十八年九月三日、山口縣阿武郡明倫小學校長に任ぜらる。時に五十五歳。是れ我が明倫小學校初任の校長なり。是より先、萩に數個の獨立せる小學校あり。是歲七月、新に之を合せて一校となし、明倫と稱す。しかして從來各校の爲す所、及び、多數教員の思想は、一致せざるもの少からざりしを以て、之を統御するは實に容易ならず。遂に、先生をその任に煩はすに至れり。二十年三月二十八日、願に依て職を免ぜらる。

先生沈重寡黙、風手威ありて猛からず。その學校長たるや、部下生徒は、皆活氣横溢して拘束を受くることなし。然れども、先生を望見すれば、容を正しうせざるはなし。先生事を執るや、縝密にして、勤勉倦まず。學校長たるも、必しも悉く事務を部下に委ねず。躬亦兀々として之を行ふ。故に、部下、多く先生の拮据多忙なるを見て、その閑談するを見ることなし。是れ、藩政時代よりの習慣なるべし。

明治二十年四月、阿武郡第一掛學務科第二掛勸業科勤務を命ぜらる。二十一年五月十五日、阿武郡士族勸業學事奨勵方を委囑せらる。當時、萩には、未だ女子の中等教育機關あらず。會々眞宗婦人會

題小照

五十年光彈指間。歷過^ス世路^ノ幾多^ノ艱。
老來一擲^ス經綸事。剩見^シ瘦軀^ノ鬢髮^ノ斑。

朝花

天出^{シテ}奇^ニ芳^ニ殖^ス大東^ニ。
此花何處^ニ知^ル尤好^キ。
敢容^テ桃李^ノ伍^ニ相同^ス。
即在^チ晴朝^ニ旭影^ノ中^ニ。

點茶

添^ヘ炭^ヲ焚^キ香^ヲ鐵鼎^ニ烹^ル。
松風別境塵喧^ノ外。
茶爐對^{シテ}客話^ニ談清^シ。
沸沸^ト呼^ヒ醒^メ名利^ノ情^ヲ。

立春

大江山蹊間の雪は消れぬも春や立つらん鶯のなく
忠正公の御靈を野田神社に奉祀せられし
折に奉納すこて

かく移る世に先立ちて願れし誠ぞ神の功なりける
先生、書は、友人藤井瀨翁に就きて學べり。瀨翁は林百非の子
なり。先生、書を讀みて、得る所を筆録すること多し。名づけて
委心帳といひ。大部を成せり。今散逸して傳らず。

明治四十四年六月一日、特旨を以て從四位を贈らる。
先生一男三女あり。長女春子、同藩土山縣並枝に適く。其次を男
唯一とす。家を嗣ぐ。次は女靜子、久保信太郎に適く。三女澄子

その必要を感じ、修善女學校を創設す。先生、之が校長たり。先生は、實に萩地方女子中等教育の發萌にも盡力せられたるなり。明治廿二年、五十九歳。六月十五日、萩町長に就任す。時に、市町村制、新に公布せられ、萩町は、是まで設けたる數個の戸長役場を合併して、町制の實施となり、大に適任者を求め、先生を初任の町長に推せり。是時、東京の公爵毛利家の高輪邸内編輯局に於て、維新前後の防長史編纂の事あり。當年勤王當路の士にして、且つ文筆の素養あるものとは、先生最適任者なるを以て、公爵は、特に、先生を招きて史局を督せしむ。先生、舊主の恩遇に感じ、老軀を顧みず、明治廿三年二月廿八日、萩町長の職を辭して、上京し、三月廿五日、毛利家々扶心得を以て、編輯局副總裁を命ぜらる。

當時の編輯局總裁は子爵穴戸環なり。先生の東京に在るとき、一日、子爵杉孫七郎、その芝區白金猿町の僑居を訪ふ。床に一幅の掛軸なく、席に一杯の茶なし。唯見る簿書一室に堆く、先生其間に危坐して筆を執る。杉子敬服して措かず、之に縣英の畫幅を贈る。之を以て、先生の平生を知るべし。

明治廿三年九月十九日、先生病あり。愛宕下慈惠病院に入る。廿三日、病院に卒す。享年六十歳なり。萩妙蓮寺に歸葬す。毛利家より賻金百圓を贈らる。

先生、風流を好み、詩歌を善くし、茶道、畫技、亦堂に入る。凡そ雅會清談の席上、先生を見ざる、こゝ稀なりといふ。左にその詩歌の二三を録す。

有福直三郎に適く。

明治四十年、唯一、朝鮮に客死す。其子誠一嗣ぐ。大正十一年十月、誠一、大阪に死す。子なし。相續未だ定らずといふ。



長藩文教の一斑

一、明倫館教育

維新前後諸般の各事業を以て著名なりしものは概ね皆教育の素養あり、就中其最も顯著なりしもの關西に在りては毛利氏にして關東に於ける水戸徳川氏と遙に相映對す。初め大内氏の時公卿亂を避けて山口に來るもの多く中原の文華一時西移の觀ありき。長藩の祖洞春公其の後を承けて而も家亦儒業に出づ。乃ち京儒高倉兵庫頭菅原某を聘して顧問とし兵馬倥偬の間に在りと雖も未だ嘗て學問の事を忽緒にせず。是に於て三原黃門(隆景)は足利學校の僧白鷗を聘して筑前に學校を建て安藝宰相(輝元)は嘯岳鼎虎を記室とし豊浦參議(秀元)は

別府周徹に學び文學を崇ぶ事諸藩に超わたり。泰巖公(綱廣)の時に至りて萬治制法三十三條を作る其一條に曰く

一諸士面々常々可相嗜事

右諸士は常に文を學び武をもてあそび忠孝の道を志し假初にも禮法を亂さず義理を專として公儀を敬ひ法度を守り其役々に怠るべからず此法當家に於て古より定めをかる、元就公の制定たり今以不可怠事

即ち其の文を右にして武を左にし輔車相待ちて而して並び廢せざるは始より毛利氏の家風なるを見るべし。斯くて享保三年始めて文武講習の學舎を

萩城内に作り其四年に成る。孟子滕文公の章の語を取りて明倫館と稱す嘉永二年に至り萩中央の地を相して之を再建し其規模を擴大にす是より先正徳年間毛利廣政學舎を其領邑周防の右田に建て瀧鶴臺を擧げて教授とす。而して三田尻の處士河野通文亦私塾を開きて郷人を教育す後官に寄附して子弟講習の所とす。越氏塾是なり。又是より後文化年間山口に上田讚明なるものあり。其地未だ學校の設なく且書籍乏しきを慨き豪農巨商に謀りて學舎を設く。弘化二年藩主之を講習堂と名づけて藩の管轄とす。是れ後の山口明倫館（文久三年藩主山口に移るに及び明倫館と改め萩明倫館と共に藩學とす）なり。斯くして教育既に一藩に洽く人材彬々として出づ。後の長藩教育の盛運を説くもの常に享保を稱す。然るに泰平久しきに及び學問稍表へ士風亦漸く優柔に流る而も世の泰平に赴くと共に文柄僧侶の手を離れて士流に歸す。是に於て儒學始めて起る。而して長藩學派の變遷亦大抵天下の學風と相伴ふ。抑明倫館の學頭は小倉尙齋を始めとす。尙齋學を京都の伊藤坦庵に受け後江

戸に往きて林氏の門に遊ぶ。是に於て學風林氏に向ふ。尙齋につぎて學頭たりしを山縣孝儒とす。孝儒徂徠に學び經術文章を以て宗とし文は則ち秦漢詩は則ち唐明専ら修辭博文を事とす。然れ共王霸の辨に至りて其說徂徠と差ふものあり。太宰春臺嘗て鎌倉紀行を著はし天皇を稱するに皇某を以てす蓋し其意皇室を貶して武將を揚げんとするに在り。孝儒之を駁して曰く大東の宇宙に超ゆる所以のものは開闢以來一姓の君たること實に其一なり。徳川氏が天下を有ちて其臣位を去らざるは即ち其美德なりと。語婉なるも要は王を尊び霸を賤むるの意にあらざることをなし。雨森芳洲が其友新井君美の幕府を稱して日本國王と言ひしを難したるも亦時を同じくす。是亦長藩古來勤王の素養深きものあるに因る孝儒の後闡藩の士風全く護國の一派に趨き縣門の三傑と稱せられたる瀧鶴臺和智東郊林東溟の如き長府の儒波田兼虎の如き徳山興讓館の教授長沼大次郎の如き越氏塾の督學たりし古武江陽の如き岩國の儒玉乃九華の如き皆徂徠學を主とす是を以て徂徠の註解書専ら士大夫の間に

行はれ維新に至るまで古老尙徂徠先生を説くものありしと云ふ。寛政年間松平定信、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里を用る學説を一にせんとし専ら朱子學を唱へしより諸般靡然として學風を易へしも長藩の朱子學を主とするに至りしは嘉永の初年に在り以て徂徠學の深く一藩の人心に入りしのみならず長藩人士が其執ること固くして容易に世風に雷同せざるを見るべきなり。然れ共天下馳せて洛門の學に赴く其勢防遏すべからざるものあり。文政天保の交既に兵家吉田大助（松陰養父）の如きは朱子學を好み徳山の教授小川道尹、飯田一郎左衛門等徂徠學の徒の文藝に馳せ内省の工夫に乏しきを慨し共に謀りて朱子學を唱ふ。斯くして朱子學漸く藩内に入り諸先生次第に其修むる所を改めて朱子學を講じ忠正公の時遂に一藩を擧げて此學を主とするに至る。此間に於て一種の新勢力を萌芽し漸く崛起の狀をなさんとすもの吉田松陰の松下村塾是なり。松陰は軍學教授の名を以て塾舎開闢の許可を藩府にうけしが（當時松陰は米艦訪問の事に座し蟄居中なり）其子弟を教ふるや一に

實用に適し實際に應ずるを以て第一義となす。故に大義名分論にあらざれば則ち富國強兵説なり。松陰曾て門人某に示して曰く村塾の第一義は閭里の禮俗を一洗して枕戈櫛櫛の風となすに在りと。以て松下村塾教育法の一斑を察すべし。要するに活潑有爲にして氣慨ある士を鍛鑄するは松陰の目的とする所なり。而して藩學明倫館は普く藩士を教養する所にして夙に海内に名あり。其設備の至れる諸藩中稀に見る所とす。然れ共學風猶未だ門閥長袖を尙ぶの痕跡を免れず。其教養の法亦尋常規矩の外に逸出すること能はず加ふるに卒族の子弟の如きは當時未だ入學するを許さず（文久年間に至て之を許せり）是を以て班卑くして氣慨あるものは皆争ふて松陰の門下に聚る。明倫館の諸生が故書敗紙の裏に彷徨せるの間に於て松下村塾の門下生は早く既に時事に通曉し國家の安危を以て自己の休戚となすに至る。松陰は善く此徒をして悉く松陰化せしめしなり。是に於てか長藩後進青年子弟の氣風俄然として一變し文武の修養既に諸侯に超越せる長藩をして一段の異彩を加へしめ其

結果は次第に其勢力を一藩の政治に及ぼし延いて天下の大勢に及ぼせり。異日長藩士人の維新の大業を翼賛せるもの門閥名族の士に少くして小祿卑賤の徒に出でたるもの多かりしは主として之が爲なり。

留題村塾壁

吉田松陰

寶祚隆天壤 千秋同其貫

何如今世連

大道屬糜爛 今我岸獄投

諸友半及難

世事不可言 此舉旋可觀

東林振季明

大學持衰漢 松下雖陋村

誓爲神國幹

二、明倫館史蹟

一、明倫館碑

舊藩學明倫館は享保三年藩主毛利吉元之を萩城廓内堀内に創建し、享保四年一月十二日を以て開校せしに始まる。

吉元は毛利元就より第八世の主にして、長府侯毛

廟あり。聖廟に並びて大講堂あり。武藝稽古塲東にあり。文學の寮西にあり。騎馬練兵の塲北にあり。建坪二千七百三十四坪餘といふ。益田元宜、村田清風、中谷貞章等大いに重建に與りて力あり。地内に館碑二基あり。古館の碑は第二代祭酒山縣周南の記する所にして、新館碑は第十代祭酒山縣太華の記する所なり。何れも館創立の所以を述べ、その教育方針を記す。古館碑「成徳達材」を述べ、新館碑亦之を曰ふ「先侯建學文武造士其要以明人倫爲重也且文武學不本諸倫理則文流於浮華武陷於暴厲不足以造士矣故凡入學者先以此爲基本而講究文藝精練武事資之以師友勉之以歲月以成其德達其材夫然後濟々多士可以贊治裨政而宣風化之美可以衛君禦寇而爲邦家之干城矣此即所以建學造士之本意而治化之所由行也且建學造士豈獨守其封疆而已抑所以崇奉○○爲國家之蕃屏也而其要歸於明人倫則其名館之不亦至重乎」と。又新館建設の砌藩主敬親の明倫館教官に與へたる告諭に曰く「神州の國體大いに外國革命の風儀と同じからず。故に萬古一系の天朝を翼戴すること亦異邦自立の主を奉

利綱元の子なり。入りて本宗を繼ぐ。學を好み善政多し。母は備前侯池田光政の女にして、配法林夫人は同じく光政公の孫女なり。毛利廣政、桂廣保、坂時存は當時創建に功勞ありし名臣なり。按ずるに學館の創建に素因あり。即ち毛利家は其祖大江氏世々文教を掌り、韜畧兼通す。爾後累代好學の念切なるものあり。輝元公亦志ありと雖果さず。萬治制法中に文教振興を高潮せるものあり。吉元好學の念熾烈にして毛利家累代の思想を實現することに努め、法林夫人助勢するあり。海北大夫毛利廣政特に學を好み、會々藩の執政として匡弼懋むる所あり。八代將軍吉宗上にあり。大いに文教を獎勵す。茲に於て天の時と地の利と人の和と相合して、毛利家に傳統的に流れたる文教の思想は、遂に藩學明倫館として具體的實現を見るに至れり。

弘化嘉永の頃學館狹隘を告ぐ。第十六代敬親新に地を江向にトして學館を重建し、嘉永二年正月二十六日を以て落成す。廣さ一萬四千三百四十九坪餘、正門は南面して仰止門と稱す。門を入れば聖

すると大いに異なり」と以て館教育の方針自ら明かなり。茲に面白き挿話あり。それは前記碑中文、「奉○○爲國家之蕃屏也」と不明の字あるに注意すべし。蓋しこの不明の文字は幕府或は幕府に相當する意味の文字なるべし。當時の館生等は「我等は國家に忠勤を勵むことに在りては人後にそちざるを期するも、何等幕府を崇奉するの要なし。かゝる迎合的なる不吉の文字の存在を許さず」と館生相謀りて之を削り去れりとなん。當時の學徒の意氣の壯なる、勤王精神の旺盛なる以て知るべきのみ。維新回天の事業豈偶然ならんや（文字を削りたる主謀者は天野信太郎なりとか。此條史家の考證にまつ）

二、聖賢堂

館碑に曰く「聖廟居中殿堂巍然門塾修整洋水環之結構之壯輪奐之美於舊有加焉」と聖廟の前に東西兩塾あり。春秋二回釋典を行ふの時東塾は祭官の詰所とし、西塾は祭器及供物を整ふるの用に供す。今其の東塾を聖廟の背後あたりの地に移築して之を保存し、聖賢堂と名づく。堂内には聖廟に安置

しありし孔子及顔、曹、思、孟四賢の木主並に孔子像を藏す。木主は昌平覺大學頭林信勝の書する所にして本邦唯一のものなり（昌平覺にありしものは關東震災の節焼失して今はこゝに存するもの天下一品なり）

堂前の棠棣の木は新館建築の際支那直隸省孔子廟の前庭にありしを移植せしものなり。又校内各所に散在せし柳の木も同地より移植せしものなりと

三、水 練 池
館碑に曰く「廟後鑿池蓄水可以習水騎」と。當時は三本の樋を通じ清水常に流替して清澄鏡の如く、茲に水騎の型を教授して、波濤萬里水練の礎地を養ふ世界最古のプールなり。

明治九年の役前原一誠明倫館を根據地として叛亂せし時、一誠の部下官軍に内應せるものあり。前原軍の銃器彈藥を悉く此池に投じて以て用ふるなからしめたりと。依て俗に煙硝池と言ふ。

四、有 備 館
有備館記に曰く「第江都之邸未有學、更番諸士、無所肆習、今侯立五年、爲天保辛丑是歲十二月、

民教育に留意せるに感し、歸りて其藩主に卒族教育の興隆を圖るべく建言せしことあり。以て當時の盛況推知すべきなり。明治五年學制頒布後は江向小學として初等教育を行へり。現今明倫教育の前身なり。

「附記」皇太子殿下啓當日は、此敬身堂内に左の四圖を掲げて藤本町書記本校史跡の大要を御説明申し上げたり。

萩町地圖（享保年間作成の圖にして萩町現存最古の圖なり）

維新前後功臣名士出身地圖

明倫古館の圖（堀内に創立のもの）

明倫館の圖（江向に重建のもの）

殿下は此の説明を御興深かげに一々御うなづき遊ばされ、藤本書記の指し示す所に夫々玉指を觸れさせ給ひつゝ、熱心に御聽取遊ばされたり。後刻牧野内府を通じて、この四圖を復寫して差出すべきやう御下命ありたりと聞く。

今本校階上貴賓室に掲ぐる此の四圖は其後殿下御手觸の圖として一層の光輝を加へ、長く當日の光

新建學於邸、其制雖不如國學之壯闊、而講堂翼然射圃馬埒刀槍櫛、皆在其傍、更番者始得肆習、然後學校大備焉、祭酒培齊林先生、取孔子有文事者必有武備之語、署其匾、曰有備館」と即ち藩主敬親村田清風の建議により江戸櫻田藩邸に之を創建し天保十二年十二月二十一日開校す。在都藩士文武講學の所とす。明倫古館創建に當り、劍槍の二道場を建つ。新館重建の際其の二道場を合して構内の東隅に移築す。常に武を練り、春秋二回藩主此場に武道を見る。又他流試合の道場として用ふ今有備館と稱するは江戸櫻田邸に於ける有備館の稱を襲用せるものなり。明倫館の建物中今に原形を止むるものは此館のみなり。

五、敬 身 堂

始め新堀に建て後江向船廻に移す。

明倫館は士分の者の教育所にして、士分以下の者はこの敬身堂に學ぶ。教師は明倫館の職員之を兼任し、極めて平易なる教材を用ひて庶民の智能開發に力む。廣島藩の心學者奥田賴枝三度來りて敬身堂に心學道話を試みたることあり、毛利藩の庶

榮を物語るものなり。

有備館記

良齋 安積 信撰

繫長州與朝鮮女真對、爲海西要鎖、賢主代興、隆文崇武、忠厚禮義之風藹如也、先是泰桓公始建學於國、曰明倫館、一厥制寔備、第江都之邸未有學、更番諸士、無所肆習今侯立五年、爲天保辛丑是歲十二月、新建學於邸、其制雖不如國學之壯闊、而講堂翼然、射圃馬埒刀槍之櫛、皆在其傍、更番者始得肆習、然後學校大備焉、祭酒培齊林先生、取孔子有文事者、必有武備之語署其匾、曰有備館、而信奉命爲記、曰、三代之盛、文武合爲一塗、其建學造士也、導之以道德教之以詩書禮樂、凡所以正心修身、經理天下國家者、固已爲精詳、而車馬弓矢之事、出兵授捷獻誠之法、亦莫不於是焉講明之、故學者皆修仁義忠孝之道、習禮樂射御之術、才與德俱進、文武惟其所用、天下無事、則可舉以當公卿百執事之選、而隆泰平之化、有事則援桴鼓、持干戈、仗義敵愾、以致斬獲之功、此豈非薰陶漸摩之功乃能至此耶、蓋不學文、則無以明倫理、達政教

不講武、則無以桿封疆、討寇賊、二者相須而濟美焉、此三代聖人所以建學、而育人材之本意也。雖皇朝之制亦然、信不敢旁求、止以侯家言之、遠祖江帥公、與菅原氏、世掌文教、而兼通韜略源義家師之、大著勳閔於東陲、覺阿公有文武長才、相源右府霸天下、洞春公神智雄畧、戡定十餘州、而軍旅之間、聘諸儒聽講、此繇觀之、文武一塗、乃祖宗之舊章、抑皇朝之大典、詎可不容其所自而欽崇之邪、今侯誕續先烈、建學於邸其意、將俾多士益竭力於文武、上以藩屏幕府、下以撫綏黔黎、而外則禦蠻夷侵擾之患、可謂盛矣、聞其風者、孰敢不感起、矧於忠厚禮義、始漢明帝、起大學、建辟雍、宗戚子弟、莫不受學教亦至矣、而先儒胡氏以爲、未知所以教、何則其本有未盡也、今侯恭儉慎德、勵精圖治、巍然以身爲一藩之表、而辟臣多奇才異能、篤志力學之士、苟率之以漸、摩之以歲月、則必有雄駿英偉、傑出于一世者、排肩而興、使天下之人曰、文足以明倫、理經家國、武足以桿封疆、討寇賊、惟長州爲然、豈不更盛矣哉、信以文學出入門庭

講經於館中、有余榮焉、故不敢以樛昧辭、爲之記以諗多士、庶乎其有以自勗焉、而不負今侯之盛意也、

舊明倫館神

今侯立繼修 先侯之政戒有司錄庶績申令學宮謹教化其在國也仲春 親至學宮祭 先聖行養老之事遵奉 先侯之道焉而有光矣今年二月上丁臨學行事乃命學職曰昔者 先侯有若令德貽厥孫謀其寵大矣今而不記後世子孫何觀焉其序次創建嘉績以樹學中臣 孝謹謹奉 命作文其記曰維享保三年戊戌 泰桓侯立十一年上奉 公朝之休命下奉 先侯之舊章恭儉躬帥政修慎令肝而食矣於是申 命曰嗚乎爾國子弟懋哉勿怠 神祖創業文武造士載在令甲我藩國敢弗承守且昔我 先侯與汝先祖經營是邦貽茲多福仰思勤勞不遑寧居爾國子弟進德修策答揚先德否而尸居世祿安逸惟恒淫侈放肆是汝辱而先祖而余亦無告于 先侯之靈禮樂射御敬業時敏 先侯之訓也懋哉勿怠成德達材以篤爾祜國政就延廣政廣包廣保廣通宣揚令德將順懿美率宗族巨室耆老子弟以奉 命也是年秋

遂命有司興學宮越明年己亥正月告成於是二月上丁始祭 先聖四配於學賓耆老觀養老之道著

爲常典世世無替謹按庠序之設將使斯民納乎軌焉者也是以自古以來有土者未之或違光耀史策稱頌盛德而世不絕筆也 大東學政載在延熹式自

皇都以及列州莫不有學焉春秋祀典取法李唐而內外異制尊卑有等其於教化之法欽崇之意未始不同矣中葉以來國史失官降及戰國喪亂相尋制度陵缺 先王之大經大法殆乎熄矣當是時也

干戈爲政庠黷無聞 神祖武成帥諸侯而紀政輒徵林羅山氏咨詢時務於是儒教蔚興海內嚮風爰逮

憲廟興學宮飭祀典語見林學士記宗藩三國賀會備土文獻迭顯隆比齊魯其它列侯小國相繼而起往往有河間文翁之稱延天以來於斯爲美猗歟盛矣哉我國自 洞春公霸西土也聘高倉管子講學三原

黃門師足利白鷗洲豐浦參議學別府周徹自此後嗣無不有師儒也先臣之敦詩書者有徒矣上之教也且昔 先世世司 皇朝文命以膺斯民也功烈侯藏在天府宜永世蕃昌保譽命以禮祀于大國也孝孺承乏儒曹與佐佐木雅真議之政府規度學宮

注記祭儀申詳功令宮成都名曰明倫館取諸孟子之言北爲 先聖廟講堂居中左爲經籍之庫右爲

厨厨之西爲齋舍廩生員內門外環以列樹講武東爲劍西爲槍射圃在其西旁圃爲講武經習曲禮教天文數學之樹射圃南童生學書之舍大門外壯士習騎之埒凡子弟當業而肄者莫不備設內衛帥二員統領學事詩云迨天之未陰雨徹彼桑土綢繆牖戶君子若欲綢繆國家宜莫若學豈弟君子民之父母傳曰學殖也不學將落教之不落其爲父母也大矣畏天之威于時保之由是以事厥祖由是以述其職恭敬之至也所謂君子有穀詒孫子子胥樂兮者 先君之謂也靡有不孝自求伊祜者 今侯之謂也謹記盛事且錄贊事有司姓名以垂後昆云元文六年辛酉春

明倫館新碑

天下之事有守舊而不可易者有隨時而可變者其可變者而不變則因循苟且萎萎不振其不可易者而易之則舊章頽壞百弊隨之故如綱常之大經國家之重典固當萬世守之而不易焉至制度文爲時勢或有窒礙者又不可不一新而變通之矣昔 泰桓公之創明

倫館也蓋將大興學以張教化乃量度時宜相地於城門之內以經營焉而人倫教化之道立而文武造士之法備矣爾來迄今百三十年 列世相承繼志述事文武講習之士日增月多昔之所經營今也狹隘殆不能容非宏其規模而增其式廓則不得適時勢之宜矣及今侯立而不承遺緒宵旰匪懈思以紹明前烈乃命宰臣曰欲張其末者必厚其本欲遠其流者必浚其源學校者政治之本教化之源治國者之所宜先也而先公創建規模既備矣今又廓而宏之豈非繼述之道也耶汝其與有司議之於是執政與有司胥謀乃就府下中央之地而別擇寬敞之區重營其宮肇工於弘化丙午迄今春告成 聖廟居中殿堂巍然門塾修整泮水環之結構之壯輪奐之美於舊有加焉講堂在其西庖厨學舍相次而西東則爲演武之場北則爲練兵之區小學有堂肄禮 舍天文書算之場騎射調馬之埽亦盡具焉廟後鑿池蓄水可以習水騎講堂之北別設館爲 公臨學而養老試士之所而四外周以溝塹大門在南以正方面於是學校之制煥然大備而講習之士皆得以俛焉盡其力矣是其隨時而得變通之宜者也而明倫之名不易其舊者何也蓋 先公建學

文武造士其要以明人倫爲重也且文武之學不本諸倫理則文流於浮華武陷於暴厲不足以造士矣故凡入學者先以此爲基本而講究文藝精練武事資之以師友勉之以歲月以成其德達其材夫然後濟濟多士可以贊治裨政而宣風化之美可以衛君禦寇而爲邦家之干城矣此即所以建學造士之本意而治化之所由行也且建學造士豈獨守其封疆而已抑所以崇奉爲 國家之蕃屏也而其要歸於明人倫則其名館之義不亦至重乎是其守舊而確乎不可易者也然則 今侯之圖重建乃變其可變者而守其不可易者誠可謂繼述 列世之志業而昭明之也已館成命臣禎爲之記禎以承乏學職不得辭謹叙重建之由以繼先臣孝孺之所記云

嘉永二年歲次己酉春三月

館祭酒山縣禎文祥謹撰

三、明倫館現存遺物

一、四周の老松 現明倫小學校本門兩側並校舍南側に連なれる天を摩するが如き數十本の松樹は是れ弘化嘉永の昔學館重建の際村田清風翁の植

付けしものなり。

二、容衆の扁額 現明倫小學校玄關上に掲ぐ。是れ草場居敬の書なり。居敬名は中章、字は豹藏肥前の人、能書を以て元祿十五年菟に祿仕す、或はいふ來船清人の子なりと。

三、明倫館の扁額 現在講堂東側中央に掲ぐ同じく居敬の書なり。

四、講堂の扁額 現在講堂内南側に掲ぐ、山縣墨僊の書なり、墨僊字は貞文、通稱は慎平、墨僊と號す、明倫館記録方會頭助講に歴任し官に在ること三十年餘、祿二十石を賜ひて重く用ゐらる。

五、東塾(舊聖廟附屬兩塾の一) 今聖賢堂と名くるは是なり、中に孔子及顔、曹、思、孟の四賢の木主を安置す、牌は昌平大學頭林信勝(鳳岡)の書なり、別に聖像を藏む。

因に西塾は元郡役所に現存す。

六、聖廟 現在北古萩海潮寺の本堂となれり。

七、正門及聖廟の觀德門 現在西田町本願寺別院に在り。

八、聖廟前の萬歲橋及水盤 堀内指月神社内に傳へらる、宣聖殿手水鉢は玄關前に現存す。

九、好生館 明倫館附屬の醫學所なり、授くる所の教科は、第一科解剖學、生理學。第二科原病學、治法學。第三科藥性學、舍密學なりき。今の新堀醫會場が其の舊蹟である。

一〇、明來舎 明倫館内素小學校あり、七八歳より十四、五才迄の子弟を入らしむ、後之を濱崎本町に興す、澤三位宣嘉卿朋來舎と命名す、蓋論語の首章に取る。今日濱崎町に其の名残を止む。

一一、仰止の額 明倫館仰正門に掲げられしものにて有栖川宮熾仁親王殿下の御眞筆なりと傳ふ現在萩中學校講堂に掲ぐ。

一二、練兵塲碑 現在萩區裁判所内に在り、學館當時こゝに洋學所を設けらる、之を博習堂とす田原玄周、青木研造、松島剛藏、能美隆菴等更に頭取役たり、教科には譯書諸科、兵學科、海軍科、砲術科あり。万延元年五月一日藩は城東小畑灣に庚甲丸を進水せしめ、十二月建造を終

りて博習堂生徒を乗艦せしめ實地を練習す、是より博習堂は常に理論を講じ庚申丸其の練習艦となる。

一三、當校に藏する名士の筆蹟

掛軸之部

- | | |
|-------|--------|
| 吉田松陰書 | 廣瀬旭莊書 |
| 大江元功書 | 小倉尙齋書 |
| 山縣太華書 | 小倉遜齋書 |
| 中村牛莊書 | 山縣墨俣書 |
| 平田浩溪書 | 山田賴軌書 |
| 澤田東江書 | 杉聽雨書 |
| 額面之部 | |
| 伊藤博文書 | 山縣有朋書 |
| 三條實美書 | 毛利元昭書 |
| 田中義一書 | 山縣伊三郎書 |
| 山縣墨俣書 | 兒玉愛次郎書 |
| 眞鍋斌書 | |
| 卷物之部 | |
| 岡田馨藏書 | 木梨連書 |
| 赤川晚翠書 | 祖武宗助書 |

三四

澁谷江三郎書 香取荒次郎書
 中村百合藏書 門田駒之助書
 山縣吉之助書 白根專一書
 草場居敬書 中村雪樹書
 此の外書籍類、勤王志士の使用したる槍、銃、甲冑、陣羽織等數點保存す。

四、明倫館學頭

舊藩瀨城明倫館は享保四年乙亥藩公泰恒公(吉元)の創する所にして、其年藩儒小倉尙齋の江戸に在るを召し還し業を司らしむ。學頭また祭酒と稱す。これより連綿、廢藩に至りて絶ゆ。

小倉 貞 字實操 通稱万太郎尙齋と號す 享保四年學頭と爲る在職十九年	山縣 孝孺 字次公 通稱少助 周南と號す 元文二年學頭と爲る在職十二年	津田 泰 字士雅 通稱忠助 東陽と號す 寛延元年學頭と爲る在職七年	山根 之清 字子濯 通稱七郎右工門 華陽と號す 寶曆五年學頭と爲る在職八年	小倉 實廉 字彦平 鹿門と號す 尙齋養子 寶曆十二年學頭と爲る在職二十六年
------------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

繁澤 視世 通稱權右工門 豐城と號す 安永四年學頭と爲る在職三十二年

山根 泰德 字有鄰 通稱六郎 南溟と號す 華陽の子 安永四年學頭と爲る在職十七年	小田村直道 字仲行 通稱文平 藍田と號す 文化三年學頭と爲る在職七年	中村 敬 字簡弼 通稱九郎兵衛 華嶽と號す 文化九年學頭と爲る在職二十四年	山縣 禎 字文祥 通稱半七 太華と號す 周南の後也 文化九年 華嶽と俱に學頭と爲る在職二十九年
--	------------------------------------	---------------------------------------	---

平田 淳 字士原 通稱新左工門 浩溪と號す 嘉永三年學頭と爲る在職一年	中村 任 字文淵 通稱甲助 牛莊と號す 嘉永五年學頭と爲る在職六年	小倉 實敏 字公修 通稱尙藏 遜齋と號す 尙齋の後也 嘉永三年學頭と爲る在職十八年	飯田 直方 通稱左門 任免の年詳かならず	中村 弼 字士恭 通稱百合藏 洗堂と號す 慶應三年學頭と爲る 是歲館廢在職一年
-------------------------------------	-----------------------------------	---	----------------------	---



皇太子殿下啓奉迎記

一、皇太子殿下本校奉迎の記

新緑薫る五月下旬、皇太子殿下親しく中國三縣に行啓遊ばさるゝの報傳はるや、二州の山河は忽ち榮光に輝き、百萬蒼生の心は等しく歡喜に満て

り。かくて愈々北海僻陬の地にまで、鶴駕を枉げさせらるゝと確定するや、町民は千載一遇の大盛事を賀ぎ、赤誠を披瀝して奉迎の準備に當り、恰も早天に雲霓を望むが如く、一日千秋の思ひもて、

光榮の日を仰ぎ待てり。

殊に本校に成らせられ親しく明倫館史蹟を台覽
あらせらるゝ由拜承しては、五十の職員二千有五
百の兒童、電光に打たれたる如く、恐悅感激、雀
躍歡喜せり。往時藩學明倫館の在りし當時、三條
實美公來萩のことあり、藩主敬親卿自ら案内して
明倫館文武の有様を高覽に供したりしかや、今
や時移り世變りて、事皆史蹟を變ずる今日、畏く
も

皇太子殿下御巡啓遊され、親しく先賢の蹟を樹
はせ給ふ、聖代の餘澤何物か之に加へん。

仁慈洪大無邊、皇國の臣民誰か其徳に感佩せざ
らんや、校内の一木一石をして、悉く殿下の御耳目
を御喜ばせ奉らんとの至情は、天真爛漫たる兒童
の心にも燃ゆ上り、日時の経過と共に次第に緊張
味を加へ、準備作業たる奉公行事は可憐なる兒童
の手によりて着々進捗せり。

就中、床下、窓戸、壁板の洗滌作業には、いぢ
らしくも涙ぐまじき光景を呈すること屢々あり、
而して校長以下職員が日夜肝膽相砕き、卒先陣頭

には白玉輝きて、榮光の時刻を待つが如く、四周
の老松は天空に聳つて、往事を語るに似たり。本
校を標識せる松上の大日章旗は折柄の西北風に翻
り、殿下の長門に入り給ひ次第に御近づき遊さる
ゝに伴れ、續々打ち揚げらるゝ煙火の爆音は、北
海の天地に轟き、緊張敬虔の氣満ち感激の念巷に
溢る。

かゝる中にも本校内に配屬されたる諸団体の奉
迎者は陸續として參入し午前十時既に三千人に達
す。

午後一時、光榮ある校旗を先頭に高等科兒童を
嚮導とし順次町衙前新道路に堵列して、一同森嚴
靜肅裡に鶴駕の御到着を待つ。

かくて豫定の時刻に到るや、午後二時三十分、
玉車は輻輳の響と共に御到着あらせらる。

新道路には本校二千有餘の尋三以上兒童萬歲歡
呼の赤誠を擧げて奉迎し、うち振る旗の波續く。
本校内には本門入口に天真爛漫たる幼稚園兒童、
中庭より運動場には本校尋常一、二年生、何れも
手に手に小國旗を振り翳し、心からなる最敬禮を

に立ちて指揮督勵の結果は、清爽敬虔の氣自ら漲
り、學業訓練の上にも大いに緊張味を加へ、諸事
能率の向上を示して好結果を齎らせり。加之、この
尊き體驗、この崇高なる試練は、他に求め難き一
大教訓となり、將來何物かを生まざれば止まざら
んとする志氣を鍛練せしこと甚だ大なり。誰か此
時此校に學ぶの至幸至福なるを思はざるものあら
んや。

行啓數日前は天候不順にして、陰雨連日に亘り
子供乍らも草取る手を止めて、天を仰ぎ只管快晴
を祈れり。

維時大正十五年五月三十日。畏くも本校に鶴駕
を迎へ奉るの日なり。職員は早曉の闇を破つて登
校し夫々任務に就く。此日校門には日章旗を交叉
し、玄關には紅白の幔幕を打ち廻らし、御通路に
は白布を敷き。庭上箒目整然として一塵の認むる
なし。

朝來前日までの豪雨も漸く霽れ四圍の山容濃霧
の間に現はる。やがて旭光燦として、金箭を放て
ば、五色の瑞雲中天に霞たいたり千秋園新緑の梢

行へば、殿下は微笑を洩し給ひ、一々舉手の禮を
賜ひつゝ、玉歩を運ばせ給ふ。嗚呼、何に類へん
嚴かなる光景ぞ。

千秋園中通りより藤棚を左折し、明倫館石碑の
前に立たせ給ひて、説明を聞召され、それより扈
從の高位大官を隨へさせられ、講堂に出御豫て設
けられたる、玉座につかせ給ひ、有位帶勳者に列
立拜謁を賜ふ。居田校長亦此の席に列なるの光榮
を荷ひしは、本校の無上の名譽とするところなり

これより大森知事御先導をなし奉り、聖賢堂、
水練池、敬身堂、有備館を順次御案内御説明申上
げらる、殊に敬身堂内には明倫古館並新館圖及び
明治維新功臣地圖を掲げて、台覽に供せらる、殿
下には一々御指頭を觸れさせ給ひて、具に御聽取
遊され、御感慨一入深きものあらせられし由。明
治維新の宏謨を翼賛し奉りし、勤王志士の搖籃も
此所ぞと偲はせ賜ふ、御聖慮の程畏しとも畏き極
みなり「冥あらば地下先賢よ」と思ひし利那、供
奉大官をはじめ感極まつて熱涙の滂沱たるを覺
ざりし。

運動場の兩側には、高齢者、愛國婦人會員、軍人遺族、廢兵、小學校長、學校醫、處女會員、佛教婦人會、修善女學校生徒等の數團體奉迎し森嚴の氣満ち亘りて、滿庭寂として聲なし。

初め整列するや誰れも誰れも、奉拜の光榮に浴せんものをご心自ら前に進み出つる様子ありしが御英姿颯爽として、玉歩を運ばせ給ふや、餘りにも近々に咫尺し奉ることの畏れ多く、体自ら退き感極まつて恩涙に咽ぶものあり。高齢者中には端座叩頭、涙を湛わて合掌するものさへありし。

眞に國民精神の躍動を感じて、無上の歡喜に浸る、未だ日本精神滅びずの感切なり。

かくして運動場御通過東裏門に向はせらるゝや一同は最後の最敬禮をなし謹んで奉送の誠意を表す、殿下には徐ろに御召自動車に御乗り遊ばされつづいて供奉の大官、佩劍の響を殘して扈從し奉る。莊嚴の氣漲り、しばし茫然たり。

殿下の神々しき御英姿と、今日の有難き感激とは強く我等の腦裡に印象を止め、皇室に對する愛慕憧憬の熱情は迸れり。

訓せられたることなり。而して諸般の凡事議論の末葉にあらずして、其の悉くが實現實行にあることを痛切に體驗し得たるにあり。

夫れ人生は夢にあらず、幻にあらず、實に眞劍なり、凡百の事業は自己の全身全靈を打ち込むことに依りて、始めて開拓せられ、理想化せらるゝものにして、人心作興の根本は茲にありと信す。行啓記念事業たるや、有形のそれく甚だよし、されど個々の精神に無形の活きたる記念碑を建立するの更に必要なるを痛感す。

百万縣民、三万町民、小さくは二千有五百の職員兒童、その各團體が打つて一九となり、大同團結以て各種事業の進展をはからんか、その成果や期して見るべきものあらん。しかも此の感激とこの教訓を之が活動の原動力たらしむるに於ておや。

二、皇太子殿下本校行啓日誌

皇太子殿下本校行啓遊せられ、職員兒童一同親

謹んで惟ふに今回の此の邊隅への行啓は、之れ全く、皇室の優渥なる御恩惠の普ねきの致す處なりとは云へ、一には我が郷土先賢が終始一貫、熾烈なる國家的精神を發露し、維新の宏謀を翼賛し奉りし遺勳の然らしめしこと與りて力ありしならん。

嗚呼、地下の英靈必ずや、皇恩の鴻大無邊に對し坐ろに感應感泣せしことならん。吾人亦此の光榮に浴し唯々感激其物の外何物のよく語るべきなしと雖、退いて郷土先賢に對する時は衷心慚愧の念に堪わざるものあり。之等先人の盡したる大精神を傳統し振作せざれば、何を以てか今日の光榮に答ふるを得べけんや。

四旬に亘る奉迎氣分は之を永遠に保持し、常にこの緊張味を持續し、以て平素の天職に邁進し、奉公の赤誠を捧げざるべからざるを痛感す。殊に行啓に當り強く刺戟されたるは、吾人は平素如何に不用意にして徹底味を缺きつゝありしやの一事なり換言すれば事毎に眞實なる誠意を捧ぐる事の如何に不徹底なりしかを現實に指摘され、切實に教

しく、殿下の御英姿に咫尺し奉るを得たるは、本校の無上の光榮で、左の日誌は特筆大書すべき意義極めて深遠なるものである。

三月十六日 木下東宮事務官縣知事警察部長ヲ隨へ本校ヲ視察セラル。

職員會。皇太子殿下本縣行啓ニ關シ指示注意。

四月廿三日 臺覽競技本郡青年團豫選會。本校運動場ニ於テ執行

本校周山訓導伊藤齋藤訓導外三名役員ヲ命セラル。

五月 一日 皇太子殿下行啓ニツキ本校内ノ清潔整理事務ヲ分掌ス。

五月 三日 皇太子殿下奉迎提灯行列ニツキ協議會ヲ都衙ニ於テ開カル。本校周山訓導委員ヲ命セラレ出頭。

五月 四日 本郡校長集會開催(行啓事務打合)。午後一時三十分

ヨリ森公會堂ニ於テ前東宮武官陸軍歩兵大佐濱田豐城氏ノ

皇太子殿下御高徳ニ關スル講演會アリ職員之ヲ聽講ス。

午後四時ヨリ萩町役場樓上ニテ提灯行列打合會アリ

五月 九日 臺覽成績品選定調査ヲ命セラレ。

五月十一日 本日ヨリ奉公行事開始。校舍内外教室ノ窓戸、壁、

壁板ノ洗滌塗換。便所ノ修理。運動場ノ地均シ等ノ作業ニ着手ス。

五月十二日 午前十時警察署ニ於テ警備ニ關シ各團長會議開カレ

周山訓導出席ス。

五月十三日 午後一時處女會員集合。奉迎ニ關スル打合チナシ。
指月神社參拜。

五月十四日 提灯行列豫行實施協議會ニ周山訓導齋藤訓導出席ス

午後七時ヨリ青年團幹事會ヲ開催シ諸般ノ打合チナス。

五月十七日 千秋園除草作業ニ着手ス。毎日一時間宛奉仕。

五月十八日 本日ヨリ庭園樹木ノ剪刈手入ニ着手ス。居田校長專
心之ガ任ニ當ル。

五月十九日 皇太子殿下本日午後零時三十分東京驛御發車中國三
縣行啓ノ途ニ上ラセ給フ。

本日ヨリ毎朝午前六時殿下行啓中一路御安泰祈願ノ爲居田校
長周山訓導ヲ隨ヘ松陰神社ニ參拜ス。

午後二時横須賀驛御着車ノ時刻ヲ待チテ遙拜式ヲ舉行ス。

五月二十日 午後三時尋五以上男兒童提灯行列豫行演習ニ參加ス

五月廿一日 本日ヨリ第一時ニ於テ奉迎場所整列練習ヲ開始ス。

午後一時ヨリ蚊驅除宣傳テリノ爲四方面ニ分レテ旗行列ヲ行
フ。

五月廿三日 萩中學校ニ於テ御親臨豫行演習行ハル。

大森事知親シク臨場セラル。

午後一時大森知事本校下檢分チセラル。

五月廿四日 第一時奉迎整列檢閱ノタメ自動車ヲ以テ行フ。

五月廿五日 松陰神社春祭。授業第二時限後兒童全部參拜。行啓
御一路御安泰祈願併セ行ハル。

五月廿六日 本日ヨリ奉迎諸準備完成テ期ス。第二回蚊驅除宣傳
旗行列ヲ行フ。

新道ニ至リ奉迎提灯行列ニ參加シ萬歳三唱ノ上奉迎行進歌ヲ
唱ヘナガラ一ハ吉田町ヨリ熊谷町ヲ經テ一ハ御許町ヨリ八町
江向ヲ經テ本門ニ合シ萬歳聲裏ニ解散此夜本校講堂ハ臨時御
避難所ニ當テラレ校内ノ警戒極メテ嚴重ナリ。講堂内ハ百燭
光三箇ヲ點シ机、椅子等整然ト設ケラル。警官五名圖書館ニ
夜直シ在郷軍人會消防團十數名夜警ニ當リ本校宿直員ハ増員
シ周山神代藤井三訓導交々不寐番ヲツトメ萬遺漏ナキヲ期シ
メリ。

五月廿一日 午前五時三十分尋五以上兒童校庭ニ集合大照院暖ニ
テ御一路御安泰ヲ祈リツ、御奉送申上ゲタリ。
十時半ヨリ青年團役員本校ニ集合シ四句ニ餘ル時日ノ間、訓
練ノ結果漸ク好成绩ヲ擧グルヲ得タルヲ喜ビ、慰勞會ヲ催シ
各々感想談ヲ行フ。

六月 一日 第一時講堂訓話。第二時ヨリ御假泊所トナリシ毛利
別邸ヲ拜觀ス。午後二時ヨリ教員一同笠山行啓跡拜見ノ爲登
山。
六月 二日 曠古ノ盛事ニ浴シタル本校職員ノ光榮ヲ記念スル爲
支關前ニ於テ撮影ス。

六月 三日 第一時講堂ニ於テ、今回 殿下ニ親シク咫尺シ御説
明申上ゲタル元本校訓導藤本瀧江氏ノ御高德講話アリ。
六月 五日 午前十一時町内各學校尋四以上兒童本校庭ニ集合、
殿下御手觸ノ物品配布式行ハレ土井町長ヨリ夫々配布セラル
本校ニハ明神池ニテ御使用ノ荒垂柄杓一本ヲ戴ク。

五月廿八日 皇太子殿下ハ午前十時三十分宮島驛御發車同十一時
岩國驛御着車ニテ愈々山口縣ニ入ラセ給フニヨリ遙拜式ヲ行
ヒ。ソレヨリ御行程御安泰祈願祭ヲ縣社春日神社ニ於テ執行
セラル、ニ付職員兒童一同參拜祈願ス。

午後一時ヨリ奉迎式豫式ヲ行ヒ奉迎歌ノ練習チナス。

男子職員ハ築山女子職員ハ校門前溝邊ヲナシ當日遺憾ナキヲ
期ス。

五月廿九日 午前九時本縣廳前庭ニ於テ奉迎式舉行セラル、ニ付
本校ヨリ學校長代理トシテ周山訓導列席ス、本校ニ於テモ同
刻奉迎遙拜式ヲ舉行ス。

朝來降雨甚ダシク山口町行啓ノ御様モ思ハレテ恐懼ノ極ナリ

午後細雨霽々天候次第ニ霽ル、模様アリ一同肩ヲ開キテ校庭
ノ清掃。玄關ノ設備、御通路ノ掃拭等ニ忙シク、宮内省ヨリ
ハ講堂内ノ設備ニ多忙ナリ。

五月三十日 本日ハ畏クモ本校ニ鶴駕ヲ迎ヘ奉ルノ日ナリ。
豫定ノ時刻タル午後二時三十分本校ニ行啓遊バサレ本門ヨリ
築山北側ヲ經テ玄關白布ノ上ニ御足跡ヲ印シ給ヒ、千秋園中
通りヨリ藤棚ノ處ヲ左折セラレ明倫館石碑ヲ臺覽ノ上講堂ニ
御成リ遊バサル。是ヨリ聖賢堂、水練池ヲ御覽遊バシ講堂東
側ヲ經テ敬身堂ニ向ハセラレ中ニ陳列サレタル明倫館古館新
館圖並ニ明治維新功臣地圖ノ説明ヲ聽コシ召サレ續イテ有備
館ニ成ラセラレ藩學ノ武道試合ノ有様ヲ想バセ給ヒ東裏門御
通過御召自動車ニ移ラセラル。

午後五時三十分尋五以上男子校舎南側ノ新道路ニ集合シ土原

三、兒童の奉迎文
クラウタイシテンカ
尋一智 阿部 光 一
クラウタイシテンカ
尋二義 秋 山 實
僕は皇太子殿下が、おいでになるはなきをきました。僕は殿
下がおいでになるころは、雨がまい日ふつて、しんばいでありま
した。萩へおいでになった日は、お天気になつてうれしかつたさ
おもひました。僕がいへをでるときは、ちよぼ、ちよぼと雨がふ
つて、しんばいでありました。明倫へきたときは、びか、びかこ
お日様が光つて、おめでたうございました。おほがししゅうへい
つて、皇太子殿下を、おがみました。そのときしつけないを、なさ
いました。くんしやうを一つつけて、おいでになりました。僕は
いのちよりも、ありがたくおもひました。
ありがたい、ここ
尋四禮 高 杉 晴 水
皇太子殿下には、今度萩町に行啓になりました。其の日は氣づ

かはれた雨もやみ、きらきらと日がかがやいてゐた。鳥どもは空をうれしうにさびづつてさびまはつてゐました。萩の人も田舎の人も青年も私ども皆よろこんで、お出むかいをしましたオートバイ三だいを先頭に多くの自動車がある走り走つて来ました。おそれおほくも前から三だいの目の栗色の自動車が、殿下の乗つておいでになる御車でした。皆の人々も、ありがたい事といつてゐました。私は何ともいはれぬ涙が出る様な気がしました。

殿下は萩の地を見つめて

尋五義 佐伯 一男

時は五月三十一日、まさに時計は午前八時を報じた。その時だ二十一發の皇禮砲は新緑の朝の空に響き渡る。皇太子殿下のお召列車は汽笛を鳴らして萩驛を發車した。僕等は先生の号令によつて、最敬禮をして顔を上げる。列車は目の前をゆるく傾斜のレールを上る。僕等は聲を上げて萬歳を唱へた。僕等の小さい目にも皇太子殿下の御姿がはつきり見えた。殿下には海軍の軍服を召して手な後におまはしになり、萩の地を見つめておいでなされる。僕は何だかうれしくてたまらない。その時ゆかしい夏みかんの香がぼつと鼻先にあたるやうだつた。御車は早さを増して行く。あゝ木の間がくりに煙が見える。汽車は一條の煙を残して彼方へ足早く去つてしまつた。お日様はここにこゝこ笑つて雲間から顔を出す。空を見つめて居る。殿下のお顔や、尊さや、萬歳の聲が次から次へと頭に浮かんで来る。右手にしっかりと国旗を握つて。

萩町行啓の皇太子殿下 尋六忠 竹田 貞子

五月三日にはかしこも 皇太子殿下が我が萩町へ行啓遊ばされた。私達は町役場の前でお迎へする豫定である。午前十一時半に家を出て指定の場所へ急いだ。道々軍服を着けた軍人、紋付を着た人々がいかめしく歩いて行く様を見ると、今日の光榮に胸のおどろのを感じる。

指定の場所は江向の若松屋筋である。行つて見るさう殆んど人が来て居た。人込の中をわけてやつと忠組の集つて居る場所へ来た。皆のはれやかな顔、萬物すべてが今日のよき日なごさほがぬはない。約一時間としていよゝ役場の前に行くことになつた。お迎へする場所では高等二年から尋常三年までが四列の隊形を作つてならんだ。お通りになる十分位前になると、あたりは水を打つた様に静まりかへり、時々かへるのなく聲ばかりである。いよゝ御通過の時刻になると伊藤先生の號令に續いて金子先生の號令がきこえる。

最敬禮をし頭を上げれば向から續々勢のよい「萬歳」が傳はつて来る。私達が「萬歳」を三唱すると同時に 殿下の御召自動車はおごそかに我々の前を御過ぎになつた。陸軍大佐の服を召された 御姿を拜するさ今更ながら 皇太子殿下の御高徳、我が 皇室の尊さを身にしてみても覺れた。明倫校内の奉迎の人々に御會釋を賜ひ、講堂で御賜詞があり、聖賢堂有備館を御巡覽になつたさうである。そして再び萬歳歡呼のうちに松陰神社に向はせられた。我が萩町の人々が至誠を以て 殿下をお迎へし、めでたくお送りした。こゝは我々にまつて一番うれしいことである。御道中御つゝがなくこゝ

四二

あゝ五月三十日

尋六仁 小橋 一男

あゝ、忘れもせぬ、あの五月三十日は、皇太子殿下奉迎の日である。あゝ、待ちに待つた、千歳一遇の皇太子殿下奉迎の、晴れの日、當日は天候さといひ、町の有様さといひ、其の他總べてのものが、それぞれ生氣に満ち満ちて居る。

晴れの此の日を、如何にして迎へやう、僕等の胸は唯をざりにたごるのみ折しもブアーとけたたましい音を立てて、二臺のオートバイが我が面前を、過ぎ去つたかと思ふと、忽ち先頭の方から開ける、威勢のよい、伊藤先生の「最敬禮」の號令に皆しんと静まりかへり音一つたてず、さも心から奉迎するらしく、僕もうやうやしく敬禮した。續いて生氣凛々たる高等科の萬歳の聲、又續いておこる我が尋常六年の萬歳の一聲、御召自動車も音もなく、するする地上を走り早くも僕等の前方にさしかつた。うやうやしく車内を伺ひ奉れば、殿下は陸軍服を召され、其の雄々しさは實に言語に絶してゐる。其の間に御車はすつと過ぎ去つて、最早御影も見ぬ。

二十分もたつたかと思はれる頃、又も前の様に二臺のオートバイの前驅が通り、其の後から、御召自動車も走せ來つた。一同が感激の餘りに唱へる、萬歳三唱は實に、殿下をお喜ばせ申した。こゝであらう。殿下の御召自動車も彼方へ消へて行つた、其の後から續々三十臺もある自動車も通過した。そして群集も皆散つた。僕等はそれぞれ先生の命によつて解散し、感激を胸にいだきながら我が家をさして歸つた。

きげんうるはしく還啓あそばされることをひたすらお祈りしてゐる。

永久の思 出

高二義 原 芳太郎

嗚呼、忘れ得られぬ美しかった行啓の夜、萩町民の長く記憶せればならぬ三十日の夜、深く印象附けられた奉迎の晝はいつの間にか過ぎて、やがて静かな暗の空が浮て來たが、萩町内は、皇太子殿下を此の地にお迎へ申した喜びで、心が躍り上つて落附いてゐないらしい、何だかそわ／＼してゐる。

僕等は隊を組んで右手に火をともした提灯を持つて、毛利別邸の裏側の新道路に集つた、各團の人々が騒ぐのが暫く止まなかつた。

もうあたりの田畑は薄ぼんやりと見ゆるやうな頃になつた。薄暗い空は提灯の燈に照らされてほの明るくなつてゐる。提灯をこゝとして煙を出してゐる者もある。右を見ても左を見ても、火の波がゆれてゐるやうだ。

全く日は暮れて空にはキラ／＼美しい星が今日の行啓をお祝ひ申すやうに、まばたいてゐる、暫く立つた、今か／＼と心は躍り上つてゐた。こゝ、毛利別邸の二階の硝子障子が開かれた。先生の「氣を附け」の聲は細く而し引しまつて響いた。騒ぎ聲は止んで、水を打つた様になつた。提灯の火のもゆる音のみが「パチ／＼」と音を立てゝゐるばかりだ。炎は高く暗の空に上つて行く「敬禮」の聲は涼しく聞へた。一同は頭を下げた、頭を上げる。殿下が

四三

毛利登人 贈正四位 人さ爲り重厚孝順を以て聞ゆ、藩主の近侍より直目付に進む、常に藩主に左右し言皆な聽かれざるなし時に黨議甚し或人其禍に罹らんことを懼れ致仕を勸む、登人願みずして曰く臣子たるもの死を致して鴻恩に酬ゆる事今日に在り、志を操るこ益々堅し、九月一日俄に職を免す十二月十九日殺さる、死に臨みて談笑自若たり、時年四十四、

大和國之助 贈正四位 劍術に長ず、江戸藩邸の留守居役を爲る已にして國事の日に非なるを見て、慨然職を辭し航海術を學ぶ藩主命じて上京せしむ、文久二年世子の奥番頭となる、高杉春風と横濱の洋館を火かんとこを謀り、事泄れて果さず、元治内訌の際獄に下り斬らる、年三十

山田亦介 贈正四位 軀幹短小にして黒面、武を嗜み、學を好む力を海防築城に致し、又造艦鑄砲の事を管し、庚申丸の建造王成丸の購入に當る、元治内訌に際し獄に下り殺さる、年五十六外國に對する見識卓く、松陰共卓見に服し就て兵學を學ぶ、松陰の彼に負ふ處甚だ大。

檜崎彌八郎 贈正四位 謹嚴志操あり、久阪と共に王事に盡力す攘夷の詔下るや小郡三田尻海岸防禦の參謀となる、後元治内訌の爲投獄十二月十九日殺さる、年二十八。

渡邊内藏太 贈正四位 軀幹壯偉、國學劍技に長ず、近侍に擢てられ、公武周旋掛を命ぜらる、元治内訌の際同じく刃を賜ふ、年二十九。

松嶋剛藏 贈正四位 豪爽、繩墨に拘はらず、航海術に長ず、藩の海軍に効績大なり、文久元年三田尻海軍局頭人となる、馬關

廣澤兵助 贈正三位 軀幹長大、温實良直、吏務に練達す、元治甲子の變投獄、木戸孝允と共に國事に執掌す、王政復古の業を翼賛す、明治元年參與となり、續いて歴官民部副知事民部大輔を経て參議に任ぜらる明治四年一月九日、刺客の毒刃に罹りて没す、年三十九。

木戸孝允 贈正一位 志操廉潔、品性公明、思慮周密經綸の才に長ず、弱冠讀書、松陰に見事す、文久以來尊攘に力め禁門の變後京師に潜伏す、後薩長聯合に盡す、終によく王政維新の、大業を翼賛す、參議に任ぜらる、力を最も立憲政治創業の上に致す、明治十年五月二十六日斃去、年四十五。

山田顯義 贈正二位 松陰門下、年少にして國事に奔走、年十七御橋隊の軍監となり四境の役藝州に出戦し、戊辰の戦帷幄に參す、尋で征討總督副參謀として各地に出征し、功あり、陸軍中將に進み、參議、工部卿、内務、司法大臣に歴任す、明治二十年十一月十四日但馬生野に於て暴に斃す、年四十八。

玉木文之進 松陰の叔父大義を唱へ忠節を激勵せり、乃木大將亦其薰陶を受けたり、前原の亂に當り、慨然として自刃。

前原一誠 贈從四位 維新前後國事に奔走、參議兵部大輔となり議合はすして職を退き故山に歸る、薩の西郷、長の前原を以て相比し名聲頗に四方に聞ゆ、明治九年兵を擧げ、斬刑に處せらる。

品川彌二郎 贈正二位 松陰門下、尊攘に奔走、内務大臣に任じ子爵を授けられ、終に樞密顧問官となる、明治三十三年薨す。

穴戸 磯 贈從二位 安政以來國事に奔走、慶應年間幕府問罪使

攘夷に當り佛軍來襲を撃退し、米利堅船の再襲に逢ひ庚申沈没壬戌座礁汽鐘破裂、剛藏創を蒙る、元治内訌の際投獄斬罪に處せらる、年四十。

清水清太郎 贈正四位 高杉城主清水宗治の後裔にして三千七百石余を食む、幼にして穎敏讀書を好む、周布政之助と王事に奔走後自刃す、年二十二、其死に臨むや古道照顔色の五大字を書し朝廷及藩主を遙拜し、弟及家人を集めて主家に報すべきを諭し從容死に就く。

高杉晋作 贈正四位 磊落不羈、才鋒從橫端視すべからず、最軍事に長じ、兵士の心を得たり、年十九、松陰の門に入る、忠愛公の近侍となり、江戸に遊學し、久坂等と攘夷に執掌、奇兵隊を編制し四境の役偉功を立つ、眞に英雄的勤王忠烈の士、慶應三年馬關に病没、年二十九。

時山直八 贈正四位 松陰門下、王權回復を以て志す、奇兵隊に入り馬關攘夷四境の役に功あり、明治元年奇兵隊參謀となり維新の戦亂に轉戦して斃る、年三十一。

山田宇右門 贈正四位 強毅謙遜、常に藩の要路にありて國事に執掌す、嘗て松陰に告て曰く、世變近にあらん、層々稿簡を執り、空言を守るは字内の形勢を研究するの急務たるに若かざるなり、松陰是に於て、大いに發憤始めて洋籍を漁む、病没年五十五。

浦 靱負 贈正四位 沈重寡言清廉儉素、羽賀塞閑兵の際手廻大將となる、清風の後を受け、國老に列し、言路を開き、人才を薦め、國本を培養して功勢多し。

勝海舟と廣島に應接し陳情辯疏餘温なし幕吏のため拘囚せらる後駐清特命全權公使に任ぜられ華族に列し、子爵を授けられ貴族院議員に勅選せらる。

山口素臣 贈從二位 維新の亂に轉戦して功あり、日清北清の兩役に偉功を樹て陸軍大將に榮進、勳功を以て子爵に陞任。

鳥尾小彌太 叙正二位 奇兵隊に入り廣く天下の俊傑と交り、勤王の大義を唱へ東西に奔走、後西南の役に偉功を立て陸軍中將となり子爵を授けらる、皇漢の學に深く又佛典に精通す。

林 友幸 贈正二位 奇兵隊に入り攘夷並藩論恢復、四境の役に功あり、後元老院議員となり、樞密顧問官に列し、伯爵を授けらる。

野村 靖 少にして松陰に師事し、安政年間以來國事に奔走、文久三年三條實美等七卿長州に下るや其甲係となり君冤雪白の事に盡力し、藩論恢復に功あり、明治四年歐米を巡視して歸朝、内務、遞信大臣を経て樞密顧問官となり子爵を授けらる、明治四十二年薨す。

伊藤博文 叙從一位 來原良藏奇才を愛し松陰の門に従學す、む、幕末の志士としての伊藤俊輔、泰西文明の輸入者伊藤參議兼工部卿、憲法起草者としての伊藤伯、立憲治下の伊藤内閣總理大臣、保護政治創始者としての伊藤統監、其の功績の著大なるこ人のよく知る處なり。

曾爾荒助 叙正二位 維新前後功勞多し、司法、農商務、大藏大臣を歴任し、日露の役に功あり子爵に叙せらる、後朝鮮統監となる。

山縣有朋 叙正二位 松下村塾に學び奇兵隊の參謀となり維新の變亂に偉功を立つ、陸軍大將元帥に列し、屢々内閣總理大臣となり、公爵を賜る、眞に國家の柱石なり。

有地品之允 維新前後功勞あり、海軍中將男爵樞密院顧問官なる。三浦梧樓 維新前後功勞あり、陸軍中將子爵樞密院顧問官なる。桂 太郎 叙從一位 多年内閣總理大臣として國政に功勞多し陸軍大將公爵なる。

● 附 墳墓一覽

(萩町内ノミヲ掲ケ)

人名	墓所	摘要
毛利輝元	堀内天樹院址	國主
輝元卿夫人	同上	
長井次郎左衛門	同上兆域	藩士
毛利秀就	大照院南側毛利家墓所	藩主
毛利綱廣	同上	藩主
毛利吉廣	同上	
毛利宗廣	同上	
毛利治親	同上	
毛利齊熙	同上	
毛利齊廣	同上	

殉死八士

梨羽頼母助就云	同上秀就卿墓側	
小川兵部少輔就克	同上	
信常右京亮就實	同上	
山名内膳正就行	同上	
村上監物就正	同上	
祖式主計頭就好	同上	
久保五郎左衛門尉	同上	
山本亦兵衛	同上	
毛利吉就	東光寺山毛利家墓所	藩主
毛利吉元	同上	
毛利重就	同上	
毛利齊房	同上	
毛利齊元	同上	
甲子殉難士	東光寺境内	
益田右記門介	同上	勤王志士
福原越後	同上	
國司信濃	同上	
清水清太郎	同上	
周布政之助	同上	
竹内正兵衛	同上	
中村九郎	同上	
佐久間佐兵衛	同上	
穴戸左馬之助	同上	

前田孫右衛門	同上	同
渡邊内藏太	同上	同
山田亦介	同上	同
檜崎彌八郎	同上	同
大和國之助	同上	同
松嶋剛藏	同上	同
毛利登人	同上	同
權現原殉難士	東光寺境内	
冷泉五郎	同上	勤王志士
香川半介	同上	
櫻井三木三	同上	
山縣周南	舊保福寺址	儒家
山縣太華	同上	儒家
山縣允升	同上	同
山縣重輔	同上	同
金千重	同上	名士
渡邊内藏太	海潮寺境内	(後東光寺に改葬)
中村祇歡	同上	名士
桂路祐	同上	洋學者
長井雅樂	海潮寺墓地	勤王
津田東陽	亨德寺境内	儒家
津田渭陽	同上	儒家
小田村石門	同上	同
小田村石門	同上	同
草場晋水	同上	書家

草場居敬	同上	書家
草場大麓	同上	同
飯田左門	同上	同
飯田圭三	同上	同
烏部忠市	同上	同
岡部忠市	同上	同
岡部鶴巢	同上	同
木村鶴巢	同上	同
檜崎頼三	同上	同
瀧高鶴	亨德寺墓地	儒家
瀧高渠	同上	儒家
瀧九華	同上	同
瀧墨華	同上	同
林百非	同上	同
能美雪水	同上	同
小田村藍田	本行寺境内	儒家
有吉高陽	同上	儒家
有吉雙林	同上	儒家
中村雪樹	同上	儒家
中村西樹	妙蓮寺墓地	俳人
内藤萬里助	廣雲寺境内	明倫初代校長
河上彌市	同上	畫家
河上彌市	同上	畫家
入江九一	長壽寺境内	能吏
坂九郎左衛門	長壽寺墓地	勤王
元森熊次郎	舊光明坊墓地	同
三上斷鋳	同上	能吏
三上斷鋳	光澤寺境内	同

坪井九右衛門 光源寺境内
 櫛崎景海 俊光寺同
 澁川宮内少輔義滿 舊蓮華寺址
 宇賀島
 渡邊通 常念寺境内
 寺内暢藏 同上
 福井太郎 同上
 羽仁稼亨 同上
 中村牛莊 泉流寺同
 杉山松介 同上
 原采 舊光善寺址
 水井精一 報恩寺墓地
 財満新三郎 同上
 山縣墨俣 淨國寺境内
 天宮慎太郎 同上
 李家庸謙 長泉寺墓地
 山田原欽 蓮池院境内
 山田宇右衛門 同上
 賀屋恭安 同上
 岡本栖雲 同上
 明石くにと 同上
 繁澤豊城 德隣寺同
 香川景虎 同上
 楊井三希 同上

歌人
 備後神邊城主
 毛利元就ノ臣
 名士
 勤王
 儒學者
 勤王
 儒學者
 詩人秋月藩原震女
 名士
 勤王
 書家
 勤王
 醫學者
 儒學者
 能吏
 醫學者
 孝子
 儒學者
 武術者
 詩人

佐々木龍原 同上
 栗屋正論 同上
 冷泉五郎 同上
 宮城彦助 同上
 吉見廣長 善福寺境内
 田坂瀨山 同上
 石川瓊淵 同上
 藤村太郎 同上
 藤村英太郎 同上
 市川文作 同上
 雲谷等林 善福寺同
 和田梅翁 弘法寺同
 前原一誠 同上
 石川厚狭介 眞行寺同
 山田虎之助 同上
 堀文左衛門 同上
 熊谷元直 堀内深野町渡船場
 天野元信 長藏寺境内
 林喜八郎 同上
 平田淳 同上
 中島名左衛門 光福寺同
 仲子岐陽 大照院墓地
 高嶋醉茗 同上
 小倉尙齋 和泉寺址

五〇
 儒家
 弓術家
 勤王
 勤王奇兵隊總監
 毛利氏一門
 儒學者
 勤王
 儒家
 勤王
 儒學者
 同
 儒學者
 書家
 書家
 志士
 勤王
 勤王
 歌人
 天主教信者
 能吏
 儒學者
 砲術家
 儒學者
 醫學者
 儒家

故人の遺志

香川政一氏寄稿

萩の山中町に、齋藤貞衛といつて、明倫館出身の老儒があつた。御維新後に、明倫館の跡が、見る影も無いやうになつたのを、遺憾に思ひつゝ、其身は又、大津郡へ引越して、三隅村の人となられた。兎角する内に學制御頒布となつて、三隅村にも、小學を創建することになり、齋藤翁に命名を請うた、翁は何處かに明倫館の記念を遺したいと思つて、之に明倫と命名したが、今日の三隅の明倫校の起りである。其後明治十八年に、萩に於ては町内數個の小學を合併して、一大小學を建てることになり、中村雪樹先生がこれに命名して、明倫と呼びたいと言はれたが、縣廳はこの名稱を許可しないで、明倫館の後身は既に三隅に出來て居るといふ言ひ分であつた、中村先生は、それもそうだが眞の後身は萩に在らねばならぬといふので、二度も山口に行つて、縣廳と之を争はれ、遂に萩に明倫小學といふ名が許可になつた。それが

小倉鹿門 同上
 小倉南卓 同上
 小倉實光 同上
 小倉尙藏 同上
 雲谷等顏 榜嚴寺境内
 聽松庵幽草 同上
 時山眞八 同上
 吉田松陰 東光寺山墓地
 高杉東行 同上
 玉木文之進 同上
 玉木彦介 同上
 玉木正誼 同上
 久坂玄機 同上
 久坂義助 同上
 杉民治 同上
 駒井政五郎 同上
 堀井政五郎 同上
 矢次雅樂 長添山後方
 田福中井權藏 前小畑觀音山
 田中利吉 孝子

◆◆◆
 ◎この外脱漏せるもの多からんも漸次研究を重ねて完璧なさん讀者幸に之を諒せられんことを。

縁となつて、中村先生が明倫小學初代の校長となられたのである。中村先生後に萩町初代の町長に推され、次で之を辭して、東京高輪毛利邸の召に應じ、東上して編輯局創設の任に就かれんとするや、境二朗翁は、次の歌を詠んで、之を送られたが、豈圖らんやこれが永訣となつて、先生は程なく、東都に於て逝かれた。

中村ぬしの都に行きたまふ別れを惜み
侍りて

君にけふ別れてはたゞかへるさを

あふの松原待ちやわたらん

境翁は齋藤貞衛先生の實弟で、少壯にして吉田松陰先生の門に入り齋藤營藏と言はれたのが、即ち其人で、嘗て島根縣知事であつた。

明倫館は天下三館の一であつた。明倫小學も、天下の小學で有らねばならぬといふことに色々力を入れた人の内に、中村淳氏がある。中村氏は明倫小學創建當時に、郡役所の學務に居つた人で、努めて明倫校に有爲の教員を配置し、明倫校の施設を阿武郡内に直ちに取って施行するといふ風で、

當時の明倫校は全く阿武郡教育の研究所であり、一面には明倫校は郡役所の直轄であると言はれる迄に、氏は踏み込んで明倫校の世話もしたものである。氏は維新前山口明倫館の出身で、維新後廣島の上等師範學校を卒業し、當時に於て言は、中等教育の教員資格に相當すべき人であつた。明倫校が今日のやうに設備上及び組織の上になつて、天下の小學であると言はるるやうになつたのも、後年氏が萩町助役となつて、多年經營した賜物であると言はねばならぬ。

明倫小學から一時分離して、明倫高等小學校といふものがあつて、明治二十一年の紀元節に開校したものであるか、この校は確かに天下の小學で有つた、數學作文圖書裁縫等の學業成績特に秀拔を以て四方に鳴り三見、明木、川上、大井、奈古、福井、六島、見島等の他町村から多くの入學生を見るに至り、當時の明倫校出身者で前記諸町村の有力なる地位を占めて居る人が現に少くない、萩町として乃至明倫小學として、今日多く發展せる出身者も、概してこの高等小學の出身者に、その基

であつた。

く所を見るのである。山口縣下に於ける裁縫科の一齋教授は全く明倫高等小學校の創始にして、先づ之を阿武郡に及ぼし、次で大津、吉敷、大島、熊毛等の諸郡にも、明倫校より教員出張して講習をなし、附屬小學校にも、自らその風を傳へて、遂に縣下に普及し、他縣からも大に來つて範を取つたものであつた。明倫高等小學校附設の女子補習科は、今日の縣立萩高等女學校の前身ともいふべきものであつた。

萩の明倫館を天下三館の一に成したものは、大津郡三隅出身の偉人村田清風翁の力である。清風翁は天下の長州藩を拵けた大人物であること言を須たないが、重修明倫館の大經營は實に翁の最後の事業であつた。明倫新館が今の明倫小學の地に出來上つた際に、正門は南向きで仰止門と言つたが誰人が其處に樂書して、

南門に仰山とよみ叱られた

と諷刺した程に大規模の館で、文武諸藝、醫學、洋學より國學に至るまで、悉く具備する所あり、薩藩因州藩などよりも、留學生を送るといふ有様

中村淳氏が大津郡視學であつた際に、村田清風翁のために建碑を企て、翁の舊廬に設けられた、尊聖堂遺蹟の復興をも考へたものであるが、時ならずして沙汰止みになつたのを遺憾とし、氏の萩町助役たるや、明倫館聖廟址に翁の記念碑を立て、孔聖四賢の木主堂に名くるに尊聖堂の稱を以てした。大津郡有志大に感ずる所あり、俄に翁の三隅の舊廬を修めて碑を樹て、尊聖堂の稱を返さんことを以てした。中村氏欣然之を諾して、木主堂の名は之を前賢堂と改めた。今日存する堂の匾額は當時氏の書いたものである。

清風翁の愛用した有職故實精通の士に齋藤彦右衛門貞宣といふ人が有つた。清風翁の偉業を思ふ人は、蔭にこの有力なる學者が有つて之を助けたことを考へねばならぬ。清風翁が貞宣翁の畫像に贊を書いたのが

信古好學。幹事不流。至誠凜々。長遺孫謀。

といふ語である、以て貞宣翁の面目を知ることが

出来よう、この人老いて、藩公から殿上輿に乗りて出仕することを許された程の人である。今の萩女學校長齋藤彦一氏は真宣翁の孫で、真衛翁の子である。

大津郡と萩。そうして明倫と尊聖堂。それは單に一地方及び一地方の校たり堂たるに止らないで、よく天下の萩となり、大津となり、天下の校となり、堂となることが故人の志である。

田中總理大臣を迎ふるの記

午後三時三十分全校兒童運動場に集合し、田中總理大臣の來校を待つ各秘書官、大森山口縣知事、藤田代議士其他三十餘名の隨行を伴はれ、偉大の體軀を壇上に運ばれ、立身出生の道は孝道を盡すに在りと諄々と訓示をせられ非常に感動を興へらる。一同はまのあたり閣下の颯爽たる高風に接し益々畏敬の念を高め、又言々郷黨後進を懐むる、崇高なる情温に對し感迫つて答ふる所を知らず、敬虔嚴

蕭の氣場外に溢る。田中校長進み出で、無量の感をこめて謝意を表し閣下の萬歳を三唱す。田中首相は打振る紅葉の如き五千の手を眺めて無上の笑を湛わられ講堂内の萩町歡迎會に臨まる。

◎兒童の文

田中總理大臣

尋二智 末岡良子

私たちがみんなであつた田中總理大臣は、きのふおいでになつたので、みんなが大がいしふばにならびました。よいおてんきでありましたからあつうございました。そのとき私たちがきよろりきよろりしてゐると。こうごうのよこから田中總理大臣やたくさんの人が見へました。田中總理大臣は一ばんせいがかたくて大きな人でした。そして私たちのまへの高いだいの上にた上がりになりました。そしておまへたちをかしくすることをおしへてやらうとおつしやいました。それはたやをだいにすることだといつてました。しまひには

んざいをいふたとき、田中總理大臣はありがとうございますと三べんおいひになりました。私はうれしくありました。

田中總理大臣のお話

尋五義 横山岳朗

日本晴のよい天氣、天も地も澄み渡つて居る。忽ちどいろく煙火の音。

やがて皆は整列した。一言も口をきく者はないその時悠々と田中首相はわいでになつた。たうとい姿は壇の上によく見へた。「皆さん」とわつしやつたさまはじつにおちついたものであつた。それから「おとなしく私の來るのをよく待つて居て呉れましたね。私が皆さんの前に立つてた話をするやうな者になつたのも、孝行といふことが子供の時から私の頭にあつたからであります。皆さんも孝行をしたらきつとわらい人になれる」とおつしやつた。

たうといありがたい話がそれからと續いたそして僕等に強い感動をあたへた。唯何も考へず

耳をそばたて、一言も聞きもらさないやうにし、目は目た、き一つせず首相の顔を見つめて居た。實に我が明倫の生徒のこの上もない名譽であるその有難さが心の底からこみ上げて來た。

田中總理大臣の親孝行なこと

尋六忠 菊屋正子

「私は防府へ行く時皆さんの歡迎を受けて自動車では歩いて通るのに親は此の道を一人で傘を持つて歩いて居た。今其の事を思ひ出すと悲しくなつてつい涙が出て來る」。これは田中總理大臣が私の家へお出で下さつた時言はれたお言葉だ。聞いて居た私共は皆涙を流した。やつぱり總理大臣になられる様な方は親の事を深く頭において居られる。私はつくづく思つたいくらわらい人でも親を大切にしない様な者はほんどうにつまらない者だ。又「私はおかすを作つた事が何度もある、ある時お客様がいらしやつたから父が私におかすをこしらへる様に言ひ付けました私は一生懸命で鯛のお刺身を作つて出した

「こんななまぐさい物を出して」と叱られてほんとうに悔しかつたので寝ておた母に告げると母は私にひいきしてくれて後に父に「それはあなたが悪い此の子は一生懸命で作つたのに、それに鱈は塩水で洗ふといふ事も教へないで叱るのはかわいさうです」と言つてくれた。とお話になつた。私はそれを聞いた時母親の心といふものはほんとうにやさしいものだと思つた。そばに居た母から何だか光がさし出て居る様に覺れた。その他色々のお話があつたが、みんな親の事を思ひ出されての孝行なお心のあらはれたお言葉だつた。

田中首相來校

高二仁 山田十徳

僕等は大會集場を集つて首相の御出でを待つた



雜

錄

待つて居る中にも閣下は如何なる態度で話されるだらうかお顔は椿町にて御迎へした時よく見たが今度は御迎への時よりも尙一層よく見ようなどと次から次へと首相に對する豫感に續々と湧いて來る首相を待つこと凡そ十四五分閣下は校長先生と話をされつゝ靜かに僕等の方へ歩を運ばれつゝある。應て校長先生の挨拶も終つて首相は徐に口を開かれた。或は低く或は高く兒童二千五百又他の聴衆幾千人の中にも咳拂ひ一つだにするものなく水をうつた様に靜かだ。話は要するに孝は百行の基と云ふお話であつた。首相は溫容玉の如き中に何處となく侵すべからざる威嚴が具つてゐる。お話しがすむと校長先生の發聲で閣下の万歳を三唱した。實に天地も搖るがばかりであつた。首相は至極満足の御様子であつた。有難うを後に除に臺を下りて行かれた。

一、來校名士一覽

(自大正十五年十月至昭和二年十月)

月日	官職氏名
十一月三日	公爵毛利元昭
十一月二十日	女子學習院學生監依田豊
十一月廿一日	東京高師教授岡本作治郎
十一月廿九日	本縣學務課長末藤善三郎
十二月一日	東京高師教授大谷武一
一月十四日	本縣學務部長田中英
一月十七日	本縣視學小倉邦夫
一月廿九日	吳鎮守府司令長官海軍中將谷口尙眞、海軍中佐羽仁潔
二月廿七日	愛知縣視學内瀬勘作
三月九日	奈良高女師附屬北岡繁藏
三月十一日	山口師範學校長眞崎誠
三月十六日	文部省實業補習教育主事松本喜一、文部屬川上喜市
五月二十六日	文部省事務官兼東京高師教授福士末之助

二、本校見學の修學旅行團體一覽

五月二十八日	山口地方裁判所檢事正植田彥三郎
六月二十一日	元東京高師教授北垣恭次郎
六月廿八日	本縣警察部長近藤駿介
八月三十日	宮内省諸陵寮囑托文學博士和田千吉、山口縣内務部長赤松小虎
八月卅一日	臨時帝室編修官渡邊幾治郎
九月三日	第二十一旅團長三浦少將
九月十五日	内務省社會局勞動部長河原田稼吉、鹿兒島縣視學茂原直治
十月三日	樺太廳視學坂倉恒雄
十月廿五日	内閣總理大臣男爵田中義一、山口縣知事大森吉五郎
十月三日	諸團體名
十月四日	軍艦日進機關練習兵
十月十日	山口高等學校生徒
十月十日	宮野小學校高等科兒童
	人員
	六〇
	二〇
	七〇

十月十七日	安岡小學校高等科兒童	六〇	四月十二日	阿武郡生雲村青年訓練所生徒	五三
十月二十日	深川小學校尋六兒童	一八〇	同	佐波郡名田島村青年團員	五
十月廿一日	小倉師範學校專攻科生徒	三〇	四月三十日	大津郡濟美小學校兒童	四三
十月廿七日	山口育成學校生徒	一五	五月二日	厚狹郡高千穂小學校生徒	一二〇
同	下宇野令小學校兒童	一四〇	五月七日	下關市生野小學校兒童	九六
十月廿八日	長府小學校兒童	六〇	五月九日	山口師範學校三年生徒	一二〇
十一月三日	山口師範學校生徒	一三〇	五月一日	厚狹郡絲根小學校兒童	五七
十一月十一日	德山女子補習學校生徒	六五	五月十六日	山口町今道小學校兒童	一一〇
十一月十四日	船木高等女學校生徒	四五	六月三日	山口高等女學校三年生徒	一五〇
十一月廿一日	山形縣自治講習所生徒	二二	六月四日	都濃郡加見小學校兒童	五五
十一月廿四日	陸軍幼年學校生徒	五〇	六月六日	福岡縣鞍手郡直方小學校尋五六兒童	二五〇
十一月廿五日	小倉師範三年生徒	一一〇	七月三十一日	玖珂郡青年團員	二二
十一月廿七日	小郡實科高等女學校生徒	五〇	九月三十日	廣島高師德育專攻科生徒	一一五
十一月廿八日	九州齒科醫學專門	三	十月一日	厚狹郡吉田小學校兒童	九〇
一月廿三日	吉敷郡佐山青年團	二〇	十月二十日	吉敷郡秋穂二島補習科生徒	二〇
三月十八日	大津郡大畑小學校兒童	七〇	十月二十一日	室積女師二部生徒	五〇
三月十八日	福川補習學校生徒	一五	同	大内小學校兒童	七〇
三月廿二日	町婦人會員	三〇	十月廿六日	下關市高等小學校生徒	九〇〇
四月十日	吉敷郡今道小學校職員	二〇	計		三六四一
四月十一日	美禰郡岩永村青年訓練所生徒	四〇			

本校講堂並教室を利用したる諸會合一覽(本校主催は除く) (大正十五年十月 昭和二年十月)

月 日	諸 會 合	人員	主 催 者
十一月七日	明倫女子同窓會	一五〇	同窓會
十一月十七日	縣下商工聯合大會	二〇〇	萩商工會
十一月廿八日	劍道大會	六〇〇	萩警察
十二月八日	海軍々事講話	四〇〇	山口縣
十二月廿六日	先帝崩御遙拜式	五〇〇	在郷軍人分會
一月十五日	朝見儀に於て下賜の勅語奉讀式	一二二	在郷軍人分會
自一月十七日 至一月十八日	阿武大津校長集會	六五	山口縣
自一月十七日 至三月十四日	真崎山口縣師範校長及谷東訓導講演	九〇	萩町各小學校
自三月十七日 至三月廿一日	青年武道講習會	二〇〇	山口縣
三月三十日	小郡農業學校入學試驗	二〇	小郡農業學校
四月八日	大津農林學校入學試驗	一五	大津農林學校
四月廿一日	勤勞學園寮父都野氏學園狀況	九〇	萩町各小學校
自五月二日 至五月三日	阿武郡校長集會	四二	山口縣
五月三日	青年團長集會	二五	阿武郡
六月十日	町會議員選舉	二七五〇	萩町

六月十一日	町會議員選舉開票	七六〇	萩町
自七月十八日 至七月廿九日	徵兵檢査學力試驗	一三五〇	聯隊區
七月廿二日	割烹講習會	四〇	萩婦人會
七月三十日	希望社專務講演	四〇	明倫處女會
自八月十五日 至八月十六日	夏季講座	一五〇	阿武郡教育會
自八月廿九日 至八月三十日	郵便局通信事務員試驗	二〇	郵便局
九月四日	劍道大會	七五〇	在郷軍人
九月廿二日	青年訓練所查閱	一五〇	聯隊區
九月廿三日	家事研究會	五〇	山口縣
十月五日	縣會議員選舉	二五〇〇	山口縣
十月廿五日	首相歡迎會	二一〇〇	萩町其他有志者
合 計		一三一七九	

本校運動場を利用したる諸會合一覽 (本校主催は除く)

(大正十五年十月
昭和二年十月)

月 日	諸 會	合 計	人員	主 催 者
十一月一日	歌劇團野球會	七〇〇	萩實業	同
十一月三日	野球試合	二五〇		

十一月十三日	四十二聯隊演習	四〇〇	四十二聯隊
十二月四日	青年訓練查閱	一六〇	聯隊區
十二月五日	自轉車競走	一三〇〇	商工會
二月七日	御大喪儀遙拜式	一五〇〇	萩町
五月卅一日	青年團處女會聯合簡閱並に分列式	七〇六	萩町聯合青年團
自六月十日 至六月十四日	体操講習會	八五	山口縣
八月十日	簡閱點呼	四五〇	聯隊區
九月一日	明倫青年團體育會	一二〇〇	明倫青年團
九月十五日	萩町聯合青年團體育會	一五〇〇	萩町青年團
合 計		八二五一	

本校中等學校入學志望者一覽 (昭和二年)

志望學校名	志 望 者 數	計	修善女學校	女子師範學校	計
中學 校	五二	七	三	六二	一八〇
商業 學校	三九	一五	五四		五八
高等女學校	八九	二八	一二五		二八
					二六六

山縣公爵の薨去を悼む

本年五月本誌編纂を畫するに際し特に題字を山縣公に囑せしに其の企圖を讀し遙に東都より揮毫を寄せられ本誌をして永遠に光彩を放たしめらる。然るに今や本誌成るの時幽腹既に異り復温容に接するを得ざるを憾とすること甚切なり。茲に度みて其の畧傳を叙し追慕感謝の微衷を表す。

公は安政四年十二月二十三日萩町に生れ今津兼輔氏の二男なり。今津家は勝津家と合併して勝津と改姓す。十歳の頃叔父故山縣有朋公の養嗣子となり其の嚴正なる薰陶を受けて、學業成り、次いで獨逸に留學し、遞信、内務の官歴を経て遞信大臣に任せられ、後貴族院議員に勅選せらる、明治四十三年には朝鮮總督府政務總監となり、長谷川總督を輔けて統治の政務にいそしみ、其温厚英邁の資は、内鮮融和に貢献すると共に、半島開發に多大の功績を擧げ得たり。後關東長官に轉じ、更に樞密顧問官に任せらる、大正十四年答禮使として佛領印度支那に派遣せられたるは實に其の最後の對外的奉公たりしなり。斯の如く、故大山縣公の遺志を繼ぎたる功績が明治大正を通じて甚大なりしは頗る顯著なる事實なり。

公又風流韻事を樂み、其の得意とせし蘭畫は、飄逸超脫俗氣を離れたるものあり。興に乗ずれば、詩を吟じ、鴨綠江節を唄ひ、明月の夜一筆の尺八に、自作の名吟を吹奏する等世事を超越するところありしといふ。

郷土を愛せらるゝ情極めて厚く、毎年必ず歸萩して忙裡の數句を故山に起臥し、漁舟を阿武の流に浮べらるゝを例とせるが、本年八月歸萩同十九日東上の途に就かれしを最後として九月二十四日午前十一時腦溢血のため東京の自邸に薨せらる。

編輯を終りて

一、本誌は昨年五月三十日、畏くも 皇太子殿下本校に行啓を忝うし無上の光榮を荷ひたるを以て、永遠に之を記念せんため本年五月行啓記念日を期して編輯を企てしものなり。然るに口繪撮影に意外の日數を闊したる爲内容の一部修正の止むを得ざるに至り遷延今日となり。漸く編輯を遂ぐることを得たり。

二、本誌は郷土資料を中心とし本校施設經營並沿革の概要を紹介し併せて 皇太子殿下行啓奉迎記を加へ其他雜錄を添へたり。然るに研究尙ほ未だ幼稚にして粗漏の點を免れざるは遺憾とする所なるも之を研究の出發點とし益々研鑽を重ね誤謬を訂正し適確なる史的資料を蒐集發表せんことを期するものなり。

三、本誌編輯企畫の緒につきたるは前年度末の頃なりしを以て當時職員の勞を煩はしたること尠からず、殊に香川出、桑原茂政、竹重一正氏の幹旋に依るところ多し、茲に編輯を終るに當りて謹んで謝意を表する次第なり。

毛利元就公人材登用の道を訓へて曰く

「士に三様あり、能く之を見て、その特徴に應じて之を待遇すれば皆悦びて我が用を辭せざるべし度々賞するにあらざるものには、少し宛賞を度々與へよ。一度之を賞すれば長く恩を忘れざるものには思ひ切りて一度に多くの賞を與へよ、賞を與ふれば却て悦ばざるものあり、これ眞の士なり、能く誠意を以て之を愛用し、信じて疑ふこと勿れ」
代々の藩公この風を受けて、下臣を愛用し他藩のものを聘せず、人材を登用せり。



昭和二年十一月二十五日印刷
全 年十二月一日發行

山口縣阿武郡萩町大字惠美須町第三四番地
編輯兼 宗 實 宗 一
發行人

山口縣阿武郡萩町尋常高等小學校內
發行所 明 倫 校 友 會

全縣全郡全町大字西田町第五番地
印刷人 荒 瀨 德 治

全縣全郡全町大字西田町第五番地
印刷所 信 清 舍 印 刷 所

13P
23cm

2



萩市立図書館



111389003